

平成 17 年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館

実績報告書

目 次

独立行政法人国立美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	
1. 収集・保管	7
(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	7
(2) 保管の状況	10
(3) 修理の状況	13
2. 公衆への観覧	14
(1) 展覧会の状況	14
本館	17
「常設展」	17
「ゴッホ - 孤高の画家の原風景」展(共催展)	20
近代日本画の名匠「小林古径」展(共催展)	24
「アジアのキュビズム - 境界なき対話」展(共催展)	27
「ドイツ写真の現在 - かわりゆく『現実』と向かいあうために」展(共催展)	31
「アウグスト・ザンダー」展(特集展示)	34
「須田国太郎」展(企画展)	36
「藤田嗣治」展(共催展)	39
国立美術館巡回展「名作とは何か？」	40
工芸館	42
「常設展」	42
「伊砂利彦 型染の美」(企画展)	44
「日本のアール・ヌーヴォー 1900 - 1923」(企画展)	47
「渡辺力 リビング・デザインの革新」(企画展)	50
「東京国立近代美術館工芸館所蔵作品巡回展」	53
(2) 貸与・特別観覧の状況	54
3. 調査研究	55
4. 教育普及	57
(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況	62
(1) - 2 広報活動の状況	64
(1) - 3 デジタル化の状況	68
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	70
(2) - 2 講演会等の事業	73
(3) - 1 研修の取組	77
(3) - 2 大学等との連携	78
(3) - 3 ボランティアの活用状況	80
(4) 渉外活動	82
5. その他の入館者サービス	84

東京国立近代美術館の概要

1. 目的

東京国立近代美術館は、昭和27年に日本で最初の国立美術館として開館した。当時は、先行するミュージアム施設としては国立博物館のみであり、従って当館は国立博物館に対して、広い意味で同時代の日本美術を常時展観できる近代美術館として性格づけられた。

当館は、竹橋に、本館及び工芸館、京橋にフィルムセンターを有し、世界の近代美術の流れの中で、わが国の近代美術の系譜を跡づけ、広く美術への関心を喚起することを目的として、企画展、常設展等の展覧事業のみならず、20世紀を中心とした近代の美術・工芸作品、映画フィルムや関連資料の収集・保存、内外の美術活動についての継続的な調査研究、教育普及、出版物の刊行等、幅広く事業を行っている。

2. 土地・建物

(1) 本館

建面積	4,511 m ²
延べ面積	17,192 m ²
展示面積	4,599 m ²
収蔵庫面積	1,840 m ²

(2) 工芸館

建面積	929 m ²
延べ面積	1,858 m ²
展示面積	568 m ²
収蔵庫面積	168 m ²

3. 定員（本館，工芸館） 43人（うち本部職員12人を含む。）

4. 予算 1,217,929,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

【東京国立近代美術館本館・工芸館】

実 績

1. 業務の一元化

本部において、人事、共済、給与事務及び個人情報・情報公開制度等の共通的な事務を一元化して行っている。

2. 省エネルギー等（リサイクル）

(1) 光熱水量

本館

ア. 電気 使用量 2,655,905kWh(前年度比101.7%) 料金 37,863,450円(前年度比101.0%)

イ. 水道 使用量 16,001m³(前年度比109.2%) 料金 9,412,024円(前年度比116.3%)

ウ. ガス 使用量 381,929m³(前年度比100.2%) 料金 17,051,939円(前年度比102.7%)

工芸館

水道設備の老朽化により、漏水が生じたため使用量並びに料金が増加した。

ア. 電気 使用量 356,182kWh(前年度比100.5%) 料金 6,772,963円(前年度比103.4%)

イ. 水道 使用量 1,729m³(前年度比168.7%) 料金 832,758円(前年度比184.5%)

(2) 廃棄物処理量

館内LANの活用による職員への文書周知や会議開催案内によりペーパーレス化を実施した。

本館

ア. 一般廃棄物 18,560Kg(前年度比126.3%) 料金 389,760円(前年度比126.3%)

イ．産業廃棄物 工芸館	6,250Kg (前年度比105.4%)	料金	216,559円 (前年度比105.4%)
ア．一般廃棄物	5,900Kg (前年度比115.9%)	料金	123,900円 (前年度比115.9%)
イ．産業廃棄物	1,090Kg (前年度比 91.6%)	料金	37,765円 (前年度比 91.6%)

(3) その他 古紙の再利用, O A 機器等のトナーカートリッジリサイクルによる再生使用

3. 施設の有効利用

講堂について, 館の事業に差し支えない範囲で, 外部への貸し付けを行った。

講堂等の利用率 10% (38日 / 365日)

講演会等 18日

教職員研修会 2日

講堂貸出 18日

4. 外部委託

平成17年度も下記の外部委託を行い業務の効率化を図った。今後も各業務の見直しを行い, 外部委託の可能なものの検討を進めていく。

- | | |
|----------|------------------|
| 1 会場管理業務 | 6 収入金等集配業務 |
| 2 設備管理業務 | 7 レストラン運営業務 |
| 3 清掃業務 | 8 アートライブラリ運営業務 |
| 4 保安警備業務 | 9 ミュージアムショップ運営業務 |
| 5 機械警備業務 | |

5. O A 化

館内 LAN の整備状況

館内 LAN は全館内に整備されており, 各職員が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。館内 LAN は文書ファイルの共有, Eメールによる事務連絡に活用しており, 事務の効率化を図った。

紙の使用量 915,500枚 (前年度比120.1%)

A 4 800,000枚

A 3 93,000枚

B 4 15,000枚

B 5 7,500枚

6. 一般競争入札

- | | |
|-------------|---------------------------------------|
| 1. 本館, 工芸館 | 一般競争入札件数 3件 (総契約件数 65件) |
| | (看士・発券・出札等業務, 設備管理業務, 清掃業務) |
| 2. フィルムセンター | 一般競争入札件数 4件 (総契約件数 66件) |
| | (会場管理等業務, 機械設備等保守管理業務, 清掃業務, 映写等請負業務) |

7. 評議員会

開催回数 2回 (平成17年7月15日(金) / 平成18年3月3日(金))

議事内容 平成17年度事業の実施状況, 平成18年度事業計画及び平成16年度事業の外部評価結果について報告。

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

平成17年度は，入館者数が前年度より大幅に増加（本館179.1%，工芸館125.0%）したが，委託業者の協力を得て，展示室を始めとする室内の空調管理をこまめに行うことにより，入館者数の増加に比べ，光熱水量の増加割合を抑えることができた。

職員の資質の向上を図るため、昨年度に引き続き放送大学通信教育の教養科目の受講、外部講師による英会話研修を実施した。

【見直し又は改善を要する点】

施設の有効利用については，講堂利用案内を全国の教育機関等のみならず，一般来館者にも向けて配布し，利用促進を図ったが，前年度の貸出実績（28日）を下回る結果（17日）となったため，当館ホームページを活用した周知を図る等，周知の方法及び対象について再検討を行いたい。

紙の使用量については，平成17年度は第 期中期目標・中期計画の最終年度であり，その総括と第期中期目標・中期計画の検討，見直しのための会議・打合せ・資料作成等作業の業務の増加に伴い，前年度に比して増加した。

紙の使用量削減を目指し，館内LANの更なる活用促進を図っているが，削減量の限界に近づいていると思われるため，今後は資料媒体について更なるペーパーレス化の模索と実施を行う。

【計画を達成するために障害となっている点】

光熱水量について削減目標を設定した場合，入場者数や外気温が使用量の増減にもたらす影響が大きく，達成が困難な場合もある。平成17年度は猛暑や厳寒の影響もあり，空調機器の稼働が増えたため，光熱水量（料）の削減ができなかった。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立近代美術館)

近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。

美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。

また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

方針

【本館】

明治期以降の日本の美術の時代ごとの展開とさまざまな動向を通史的に展覧し得るコレクションの形成を目指す。絵画・彫刻のみならず、版画、素描、写真、メディアアートといった幅広い領域をカバーするとともに、常に同時代の美術の動向を注視し、新しい表現にも積極的に対応していく。

今後、明治大正期については随所に見られる欠落をうめるべく努力を続けるとともに、日本美術との対比の観点からの海外作品の補充、ビデオ等を用いたメディアアートなどの収集方針の確立を目指していく。

平成17年度は、価格の急騰するなか早急に確保する必要のある海外作品にまず重点をおき、収蔵の実現に努めるものとした。また、近年その希少性が高まる中、かねてから寄託を通じて所蔵者と良好な関係を保ってきた速水御舟作品の収集を目指した。また引き続き戦後日本の主要作家の作品を収集するとともに、メディアアートについても方針の確立を模索しつつ主要な作品の収集には早急に着手するものとした。

【工芸館】

工芸館では、昭和52年の開館時に文化庁から管理換えされた重要無形文化財保持者(人間国宝)によるものを中心とした日本の伝統工芸作品を基礎にして、明治期以降現代にいたる工芸の歴史的な展開を辿れるようなコレクション形成を追求してきた。また毎年度の企画展に関連して重要作品を購入し、あわせて同時代的に工芸の発展で深い関わりをもつ外国の重要な作家作品をコレクションに加えることで工芸館の特色を形成してきた。また1990年にデザイン部門が新設され、内外の工業デザイン、グラフィックデザイン作品が収集されてきた。それによって日本の陶磁、染織、漆芸など各素材別の工芸作品を中心に、工業デザイン、グラフィックデザイン作品、また規模は小さいが、欧米の工芸、デザイン作品など、近現代工芸・デザインの総合的コレクションが形成されてきた。

しかし明治・大正期の作品や戦後の工芸の発展に重要な作家の作品などは、なかなか市場に出ず、また高額なこともあって大きな欠落部分となってきた。また戦後の新しい傾向を示す造形的作品、欧米の現代工芸の名品、近代デザインの歴史を象徴する名品など、いくつかの主要な欠落部分がある。

17年度は、こうした欠落部分を埋め、系統的な展示が行えるようなコレクションにすべく、明治期の工芸、戦後の造形的作品、また欧米の現代工芸、近代デザインの名品などを収集する。

実績

1. 購入	155点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)
2. 寄贈	73点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)
3. 寄託	351点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)(平成18年3月末総数)
4. 陳列品購入費	予算額 185,002,000円 決算額 480,742,550円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：本館：まず、挙げられるのは、イヴ・タンギーの優品《聾者の耳》(1938)、ウィレム・デ・クーニングの《風景の中の女》(1966)の購入である。前者は2年間に渡るヨーロッパでの調査の成果であり、後者は海外流出を直前に食い止めたものである。寄託されていた速水御舟の希少作《浅春》(1918)《夜梅》(1930)の購入は所蔵者との信頼関係維持の結果である。工藤哲巳、草間弥生、建畠覚造、横尾忠則、毛利武士郎、村上友晴等、戦後日本を代表する作家たちの主要作を確保した一方、日本未紹介の重要作家マルクス・リュペルツの《ヘラの頭部》(2003)やテリー・ウィンターズの《桑実胚》(1983)を購入した。又、昨年度の「琳派展」出品の岡村桂三郎、平成8年の「90年代の韓国美術から」展出品のキムスージャ等の作品を購入し、企画展と収集活動の連携も図った。後者のビデオ・インスタレーション《針の女》(2000-01年)はメディアアートへの取組みの一環でもある。

写真作品については引き続き充実を図り、楢橋朝子、野口里佳ほかの作品を購入する一方、写真史上名高いウィリアム・クラインの「ニューヨーク」シリーズ(1954-55)の良質なプリントを購入できたことは大きな成果である。

受贈については、長く寄託されていた小林古径の《双鳩》(1937)、オノサト・トシノブ作品9点など、いずれも所蔵者との関係の結実である。寄託では、国吉康雄、藤田嗣治、小野竹喬、マンゾーニほかの作品を受け、常設展においてそれぞれ有効に活用した。又、メディア・アートの各国における収集状況について研究員が欧米に出張し詳細を調査した。

工芸館：

平成17年度は、課題であった明治期の工芸として、陶芸を代表する初代宮川香山と七代錦光山宗兵衛の花瓶の大作2点を収蔵することができた。戦後の造形的作品としては陶芸の清水九兵衛、星野暁、伊村俊見と漆芸の古伏脇司の作品、平成14年度の人形展出品作品である浜いさおの作品や吉田良の球体関節系の作品を収集することができた。欧米現代工芸では、同じく人形展出品作からアクセル・ルーカスらヨーロッパの作家の作品を購入した。またイギリスの陶芸作家である、バーナード・リーチの大作2点、ルーシー・リー、ハンス・コパーという戦後の2代巨匠の作品12点、若手の代表であるルパート・スパイラ作品3点を収集し、従来からの収集作品を加えると、充分「特集展示」が可能な点数を所蔵することができた。また欧米に近代デザインでは、代表的なデザイナーであるオーストリアのユッタ・ジカのティーとコーヒー・セットを収集し、課題であるこの分野も、昨年までのバウハウスやロシアアヴァンギャルドの作品などに加えて少しずつ充実してきた。

また昨年、一昨年と続いて近現代を代表する作家のまとまった作品寄贈があり、陶芸の荒川豊蔵9点、藤平伸8点、染色の伊砂利彦10点などの作品が収蔵された。いずれもコレクションの形成にきわめて有効な作品群である。寄託については、初代宮川香山の作品を1点受け入れたが、購入することができた。

【見直し又は改善を要する点】又は【計画を達成するために障害となっている点】

本館：昨年度から課題となっている、収集可能な作品の情報の収集については、平成17年度、海外作品について一定の結果を出したと言えるが、引き続き、作品所在や収集可能性について、より多方面にわたる日常的なリサーチを重ねたい。

又、海外の主要作家の作品は今日急激に高騰しており、数年前に比べ、著しく購入が難しくなっている。これらについては、今後、寄託の受入れや寄贈による収集も併せて模索していく必要がある。

現代美術の分野においては、新しい諸動向を常に把握し続け、収集に結びつける努力をするとともに、いたずらに流行に追随するのではなく、確固とした収蔵方針のもとに長期的な視点をも併せ持ちながら収集活動を展開していきたい。着手したばかりのメディア・アートへの取り組みも、地道に実績を積みながら明確な指針を策定しつつ積極的かつ息の長い展開を図る必要がある。又、展示会場以外のパブリックスペースへの作品設置も引き続き検討していきたい。

工芸館：課題であった明治期の工芸に関して、陶芸については重要な作家作品を収蔵できたが、漆芸や染織、金工などの分野についてはいまだ達成されていない。工芸が近代化する大正中頃から昭和初期、戦後の造形的作品、近代デザインの発展を担ってきた欧米の主要な作家の作品収集など、近代工芸・デザインの歴史をたどる上で重要な作家やコレクションの欠落あるいは弱い部分を充実させる課題は大きい。作品収集の調査や市場の調査をさらに進め、明治期の工芸やモダン・デザインの作品は高額となるが計画的な購入、寄贈、寄託を図っていく必要がある。

* 添付資料

収集した美術作品件数の推移（事業実績統計表 p. 1）

寄託された美術作品件数の推移（事業実績統計表 p. 2）

購入・寄贈美術作品一覧（事業実績統計表 p. 17）

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) 本館

展示会場

空調実施時間 24時間

温度 25.0 湿度 55% (夏期)

温度 21.5 湿度 55% (冬期)

* 上記の数値は、入館者が入ったときの設定(目標)値である。

収蔵庫

空調実施時間 24時間

温度 20.0 湿度 55% (日本画等)

温度 20.0 湿度 55% (油彩画等)

(2) 工芸館

展示会場 空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50~55%

収蔵庫 空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50~55%

2. 照明

本館, 工芸館共

すべての蛍光灯は紫外線防止3,000K(博物館美術館用)

無段階調光可能

高演色タイプ

展示室 スポットライト(ハロゲン, 着脱式)

展示ケース 蛍光灯ライン照明(博物館美術館用)

3. 空気汚染

2か月に1回, 建築物における衛生的環境の確保に関する法律に基づき空気環境測定を実施。

本館展示室では炭酸ガス排出のための排気ファンを24時間運転している。

フィルター等管理

- ・展示室 ロール・オ・マット, 高性能
- ・外気取り入れ口 ロール・オ・マット, 中性能, ケミカル
- ・収蔵庫 ロール・オ・マット, 高性能, 活性炭

4. 防災

(1) 本館

ア. 機械警備による監視, 及び中央監視室での監視。また, 火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員, 看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し, 警察, 消防へ直ちに通報される。

イ. 自動火災報知設備

煙感知器 煙式スポット型（イオン化式，光電式）
熱感知器 差動式分布型，定温式・差動式スポット型
ガス探知機 窒素ガス・液化炭酸ガス消化設備用

ウ．消火設備

消火装置 窒素ガス・液化炭酸ガス消火設備（展示室，新収蔵庫）
ハロゲン化物消火設備（旧収蔵庫）

消火器具 ABC型粉末消火器具
消火栓

エ．東京国立近代美術館本館自衛消防訓練

平成17年11月22日（火）17：30～18：00

参加人数：約50名

（2）工芸館

ア．機械警備による監視，及び事務室の監視。また，火災警報監視盤は事務室にも設置している。
有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員，看士が観覧者の誘導を行う。
機械警備中の警報発報は警備会社を通し，警察，消防へ直ちに通報される。

イ．自動火災報知設備

煙感知器 煙式スポット型（イオン化式，光電式）
熱感知器 差動式分布型，定温式・差動式スポット型

ウ．消火設備

消火装置 ハロゲン化物消火設備（収蔵庫）
消火器具 ABC型粉末消火器具
消火栓

エ．東京国立近代美術館工芸館自衛消防訓練

平成18年1月23日（月）14：00～15：15

参加人数：約25名

5．防犯

ア．警備 本館 有人警備（8：00～19：00，金曜日は21：00まで）
工芸館 有人警備（8：30～18：15）

本館，工芸館共に建物が無人となる時は機械警備を実施（24時間対応可能）。

イ．展示室内 開館時間中は常時展示室内に看士を配置，警備員による随時巡回

ウ．展示ケース ガラスセンサーを設置，機械警備と連動（本館）

エ．館内各所に監視カメラを設置，警備員による監視。収蔵庫等は作業時を除き，常時機械警備を実施（本館）。

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

引き続き，相模原分館のある旧淵野辺キャンプ跡地の利用について相模原市に対し，要望を提出中。
本館：平成17年度の新収集作品を含めて，すべての作品の記録カードを作成している。また，24時間空調の実施によって，展覧会場，収蔵庫ともに適切な保存環境が整備されている。収蔵庫の一部に，排気ダクトを介しての外気の微細な影響が見られたが，設備改修により直ちに解決した。また，収蔵庫内に屏風用の収納棚を増設しより効率的な収納を図った。
工芸館：2階展覧会場，1階収蔵庫に対する空調等の保存環境は整備している。また，平成17年度の新収集作品も含め作品の記録作成は順次進めているところである。

【見直し又は改善を要する点】

本館：引き続き、空調設備の経年劣化、空気環境の変化などを勘案しつつ、空調機の運用やフィルターの管理などを精査し、安定した空気質の管理に配慮する。

また、熱源設備が経年劣化により所定の冷温水の温度設定の維持が困難になりつつある。改修経費が高額であるため、予算要求を行い実施する計画である。

収集作品の大型化と増加の結果、収蔵庫は既にほぼ満杯であり、一部の堅牢な作品は外部倉庫に保管しているが、管理上望ましいとは言い難い。将来的な収蔵スペース確保の早急な検討が必要である。

工芸館：収蔵庫について、収集作品の増加や、企画展の開催に伴う借用作品の保管のため手狭な様相が増してきている。開館後30年を迎える工芸館では、会場、収蔵庫の狭隘化への対応や空調等の設備改修が必要であり、今後計画的な整備を行なっていきたい。特に会場や展示ケース内の照明設備の老朽化は展示に影響を与えかねない状況であり、早急な改修を検討したい。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理，保存処理を要する収蔵品等については，保存科学の専門家等との連携の下，修理，保存処理計画をたて，各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち，緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理，保存処理の充実に寄与する。

実績

1. 修理件数

(美術作品)日本画 0件，洋画 6件，水彩・素描 23件，版画 44件，彫刻 1件，写真 1件
(工芸作品)陶磁 0件，漆工・木工・竹工 0件，染織 6件，金工 0件

2. 修理経費 予算額 15,592,000円 決算額 13,385,908円

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

本館： 継続的に小まめな作品チェックときめ細かい処置を行った。明治・大正期の作品に関しては，大なり小なり作品の状態に問題があるものも多く，収蔵庫内での保管には支障が無いが，ギャラリーでの展示には多少問題のある作品や，館内での展示には支障が無いが，貸出（輸送）については危惧がある作品が多く，これらについては必要に応じて処置を施してきた。また，版画，素描作品には支持体の劣化や画面の汚れなどの問題があり，平成17年度も引き続き点検と計画的な修理に努めた。
(事業実績統計表参照)

平成17年度からは作品状態についてのより専門的な所見を得るために，それぞれのジャンル別に異なる複数の外部の専門家の協力を得るなどして，よりきめ細かいケアに努めた。

工芸館： 展示や貸出等の作品搬出時に，合わせて作品の点検を行い，計画的に修復を実施した。染織作品の一部について，長年の保管・展示や貸出等に伴う生地や裏地のシミや汚れ，繊維の傷み等が顕著となっているものが見受けられた。その中から平成17年度は，比較的公開の頻度の高い鎌倉芳太郎の着物作品6点のシミや黴，汚れの除去，縫い直しと裏地の交換を染織作家や修復業者等と密接な連携をとって行った。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 全体として深刻な問題は少ないが，全ての作品について経年による劣化，汚れは見受けられる。

今後も最適な保存環境を維持すると同時に，経年劣化に対する細やかな手入れと状況に応じた対策を講じていきたい。なお，昨年度からの課題とされた保存修復についての外部の専門家との連携は，平成17年度に一部着手したが，今後，より積極的かつシステムティックに推進していきたい。

工芸館： この数年で緊急な対処を必要とする漆工作品の修復を行ってきたが，他に専門的な手間と時間を必要とする重要な作品がいくらか残っている。今後，修復方法を検討しながら計画的に行っていきたい。

染織作品では，専門的な修復技術に配慮しつつ，緊急性の高いものや公開頻度の高いものを洗い出し，順次行っていきたい。友禅や紬織等に，温湿度や紫外線の影響による生地の損傷があり，シミや黴，また，展示中に付着する埃や汚れ等が見受けられる。数量や修復技術に応じて相当の経費を要することであり，それぞれの作品にふさわしい修復技術の研究を行いつつ，優先順位付けを行ないながら，修復計画を考えていきたい。

* 添付資料 修理した美術作品の点数（事業実績統計表 p.3）

修理した美術作品一覧（事業実績統計表 p.51）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。

(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究成果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。

(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

本館 年3～5回程度

工芸館 年2～3回程度

(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。

(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。

(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。

なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。

また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。

(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 常設展

(1) 本館

展示替 5回(屏風及び軸装の日本画等については、原則的に各会期間に展示替えを行った。)

(2) 工芸館

展示替 4回

2. 特別展・共催展 10回

(1) 本館(中期計画記載回数:年3～5回)

「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」

「小林古径展 近代日本画の名匠」

「アジアのキュビズム 境界なき対話」

「ドイツ写真の現在 かわりゆく『現実』と向かいあうために」

「アウグスト・ザンダー展」

「須田国太郎展」

「藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」

*「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」展の会期は平成17年3月23日から

*「藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」の会期は平成18年5月21日まで

(2) 工芸館(中期計画記載回数:年2～3回)

「伊砂利彦 型染の美」

「日本のアール・ヌーヴォー1900-1923:工芸とデザインの新時代」

「渡辺力 リビング・デザインの革新」

東京国立近代美術館工芸館所蔵作品巡回展

3. 入館者数 1,058,007人(目標入館者数 623,000人)

(1) 本館

常設展 288,564人(目標入館者数 179,000人)
(昨年度入館者数 195,831人 対前年度比 147.35%)

企画展 643,288人(目標入館者数 381,000人)
(前年度入館者数 324,471人 対前年度比 287.19%)

(2) 工芸館

常設展 66,263人 (目標入館者数 33,000人)
(前年度入館者数 58,075人 対前年度比 114.10%)

企画展 59,892人 (目標入館者数 30,000人)
(前年度入館者数 42,889人 対前年度比 139.64%)

* 目標入館者数の設定にあたっては、基本的に当館で行われた同種の展覧会の入館者数のほか、他館での展覧会データもあればそれも参考にしている。その上で、歴史的な評価の変動や世代による価値観の多様化といった時間の経過からくる変化、同種展覧会の開催頻度、知名度、単独主催か共催かといった運営形態、展覧会にかかった労力や経費、開催の時期(シーズン)といった問題を加味して、最終的な目標入館者数を試算している。

4. 地方巡回展(工芸作品) 2回 6,686人(平成12年度実績: 0回 0人)

5. 国立美術館巡回展 2回 15,918人(平成12年度実績: 4回 23,918人)

6. 展覧会開催経費 予算額 341,693,000円 決算額 325,953,685円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館: 常設展については、近代日本美術を通観できるという当館ならではの役割を引き続き果たしながら、平成17年度は、現代美術の一般への浸透を目指し、ビデオなどを用いた新しいメディアの作品による小企画「沈黙の声」を行ったほか、アーティスト・トーク及びそのビデオソフトの制作などに着手した。新聞、雑誌広告の掲載、チラシ作製、メールによる情報発信などにより常設展の充実をアピールできた。また、近代日本美術の海外普及にむけての基礎付けとして英語版ギャラリーガイドの販売を開始し、外国人来館者から好評を博した。(「常設展」の自己点検評価を参照)

企画展については、ゴッホ展の盛況により過去最高の入館者数を見たことは、とりわけ新しい来館者の掘り起こしという点で、本年度の成果といえよう。年間スケジュール全体としては、近代日本美術の重要作家の個展(小林古径展、須田国太郎展)、海外作家の個展(ゴッホ展、アウグスト・ザンダー展)、アジアの近代美術のテーマ展(「アジアのキュビズム」展)、現代美術展(「ドイツ写真の現在」展)と、時代的・地域的に広域の美術を比較的バランス良く編成することができたと思う。

工芸館: 工芸館活動の一層の周知を目指して展覧会毎の特長を生かした教育普及活動に努めた。夏期の「こども工芸館 動物と遊ぼう」では小・中学生向けの様々な企画を考案し、昨年を上回る小・中学生の入館者数を得た。「人間国宝・巨匠コーナー」は日本のみならず欧米の作家も取り上げ、その際イギリスの研究者によるギャラリートークを行うことにより、より一層の作品理解を図ることができたと思う。企画展では「日本のアール・ヌーヴォー: 工芸とデザインの新時代」というこれまでまとまって紹介されなかったことのない展覧会を開催した。また、関連で東洋陶磁学会の研究会(本館講堂)

を行い、これからの研究などに一石を投じることができたと考える。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 常設展については、総合的な改善の試みが好評を博している。ただし、動線、セクション、順路の設定と明確化については、検討と改良に努めてきたが、主として、細長い形状の展示室が3フロアに渡ることにより、未だに戸惑う方がいることも事実である。サイン計画の不断の検討、音声ガイドなどの導入によって改善を図りたい。

企画展については、きわめて混雑した「ゴッホ展」に際して、さまざまな課題や問題が生じた。入場制限をする一方で、会期途中から開場時間を早めたり、夜間開館日を増やすなど、入館者数を分散させるための対策を講じたが、展示場のキャパシティに由来する問題については根本的な解決策があるわけではない。いずれにせよ、大量動員が見込まれるこの種の展覧会に関しては、作品保全及び快適な鑑賞条件の確保をめぐる、今後の検討課題が残った。

工芸館： 常設展については様々な改善を行ってきたが、今後ともその魅力を十分伝える努力が必要であり、より魅力的なテーマ、展示作品のラインナップなどを考案していく必要がある。

*** 添付資料**

入館者数の推移（事業実績統計表 p. 4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p. 7）

本館

「常設展」

方 針

【常設展】

当館の常設展の特色は、20世紀初頭から今日に至る近代日本美術の歴史的展開を常時観覧していただける点にある。親しみやすく、分かりやすい展示の実現のためには、展示を系統的に行い、各時代の代表的作品をいつでも見ることができるようになることと同時に、新鮮さを失わない工夫が課題である。このため、平成17年度は各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちつつ、会期ごとに展示作品のかなりの部分（日本画・版画・写真はすべて）を入れ替えながら、各作家及び時代の多面的な相貌を幅広く鑑賞できるようにすること、会期ごとにテーマを立てた小特集を行い、新たな角度から作品に光を当てる試みを行うこと、又、セクション表示、館内解説などの改善に努め、より見やすい展示を心がけることに努めることで展覧会を分かりやすくみせるという方針で臨んだ。また、新しいメディアを用いた作品の展示にも積極的に取り組もうと心がけた。

実 績

1. 常設展開催状況

所蔵作品展「近代日本の美術」

平成17年3月5日（土）～5月22日（日）（75日間/うち平成17年度51日間）

特集展示（4階）：描かれた景観 - 移りゆく東京

版画コーナー（3階）：二つの版画集 ココシュカとコリント

写真コーナー（3階）：椎原治

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：戦後日本画の新風 横山操と中村正義

出品点数：273点（うち重要文化財3点）

平成17年6月7日（火）～7月18日（月・祝）（37日間）

特集展示（4階）：絵の中の歴史

版画コーナー（3階）：浜口陽三

写真コーナー（3階）：奈良原一高

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：瑛九とオノサト・トシノブ

出品点数：250点（うち重要文化財2点）

平成17年7月26日（火）～10月2日（日）（60日間）

特集展示（4階）：中村不折

版画コーナー（3階）：谷中安規

写真コーナー（3階）：石内都

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：沈黙の声 遠藤利克，ビル・ヴィオラ，キムスージャ

出品点数：207点（うち重要文化財3点）

平成17年10月8日（土）～12月18日（日）（62日間）

特集展示（4階）：岸田劉生 横山大観《生々流転》

版画コーナー（3階）：近代の木版画 - 創作版画を中心に

写真コーナー（3階）：ドイツの近代写真

出品点数：214点（うち重要文化財4点）

平成17年12月24日（土）～平成18年3月5日（日）（59日間）

特集展示(4階): 陽成二
版画コーナー(3階): 近代日本の水彩画
写真コーナー(3階): 田村彰英「午後」
出品点数: 206点(うち重要文化財6点)
平成18年3月11日(土)~5月21日(日)(64日間/うち平成17年度18日間)
特集展示(4階): パリの街角へのまなざし
版画コーナー(3階): 浜田知明
写真コーナー(3階): 岡上淑子
所蔵作品展(2階ギャラリー4): 現代の版画 - 写真の活用とイメージの変容
出品点数: 237点(うち重要文化財4点)

平成17年度 計287日間開催(所蔵作品展のみの開催期間 54日間)

2. 会場 本館 2階~4階

3. 入館者数 288,564人(常設展目標入館者数 179,000人)
うち常設展のみ入館者数60,810人

4. 入場料金
一般420円 大学生130円 高校生70円 一般(団体)210円 大学生(団体)70円 高校生(団体)40円

5. 入場料収入 常設展のみの入場料収入 7,494,010円

6. アンケート調査

第1回 調査期間 平成17年7月28日~平成17年7月31日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し,記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 301件(母集団16,996人)有効回答数297件

アンケート結果

・良い85.2%(253件)・普通14.5%(43件)・悪い10.3%(1件)

第2回 調査期間 平成18年2月2日~平成18年2月5日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し,記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数300件(母集団26,382人)有効回答数298件

アンケート結果

・良い80.2%(239件)・普通18.1%(54件)・悪い1.7%(5件)

7. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

「沈黙の声」展(7月26日~10月2日,ギャラリー4)に関して

産経新聞 2005年8月15日「内面に響く『沈黙の声』」(岡本耕治)

産経新聞(大阪) 2005年9月28日夕刊 「『沈黙の声』展 東京国立近代美術館」(島敦彦)

中日新聞 2005年9月28日 「キム・スージャ『針の女』」(高満津子)

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

20世紀初頭から今日に至る近代日本美術の流れを、系統的に分かりやすく展示し、より多くの方々に親しんでいただくためには、会場構成の工夫とともに広報の充実が必要である。また現代美術の普及のために、新しいメディアを用いた作品を積極的に紹介するとともに、鑑賞の助けとなる新しい工夫が必要と考えた。平成17年度は、会場内サイン計画については、昨年度の刷新に引き続き、平成17年度は4階，3階の特集展示の看板，バナーを新しく設置し、よりわかりやすい会場構成とした。広報としては、ギャラリー4での「沈黙の声」，及び10月～12月に展示した横山大観の画卷《生々流転》（重要文化財）に関してチラシを作成し、又、新聞広告，雑誌広告，ホームページ，メールマガジン等によって多角的な広報を行った。新聞では朝日新聞夕刊で、展示替えごとに年間5回の広報を行い、その時々の特集や催しを告知して、展示の新鮮さをアピールした。又、読売新聞都民版で、昨年度から引き続き「近代美術の東京」を月一回連載して、主要なコレクションの親しみやすい紹介に努めた。これらの広報活動が功を奏し、ギャラリー4での、ビデオ作品など新しいメディアを用いた現代作品による小企画「沈黙の声」は、新聞における展覧会評でも取り上げられ、好評を博した。さらに、ともすれば難解と思われがちな現代美術作品により親しんでいただくための新しいプログラムとして、常設展に展示している作品のうち、現在活躍中の作者を招いて自作の前で語る「アーティスト・トーク」を開始した。このトークの様子をビデオ撮影し、ダイジェスト版を作成して会期中に展示作品付近で上映したが、来館者の作品への興味を引く上で効果的であった。

【見直し又は改善を要する点】

常設展の広報戦略については、引き続き効果的な方法を模索していく必要がある。ホームページにおいて、これまでは、展示リストと見どころ案内を掲載してきたが、まだ当館を訪れたことのない人に対して、当館の豊富で質の高いコレクションの内容がじゅうぶんにアピールできていない。今後はコレクション紹介のページを増設していきたい。また、常設展の新鮮さを失わないために、積極的に展示替えを行ってきたが、展示されていない作品に関して、今後いつ展示されるかという問い合わせが多く、この求めに応じるための年間展示情報などの工夫が必要である。

平成17年度は、秋に横山大観の画卷《生々流転》（重要文化財）の展示を行ったが、この作品は40mという大作のため、半分ずつ二期に分けて展示せざるをえず、不満を漏らす来館者もいた。一度に全部を展示するためには長大な展示ケースが必要となるが、当館コレクションの代表作のひとつでもあり、是非実現したい。

来館者へのよりわかりやすい展示に向けて、文字情報の工夫の他、音声ガイドの導入に向けても他の施設での実績調査などを踏まえ、具体化していきたい。

「ゴッホ 孤高の画家の原風景」展（共催展）

方 針

本展は、近代美術を代表する画家フィンセント・ファン・ゴッホ（1853 - 1890）の実像を改めて紹介しようとするものである。これまで多くの展覧会が開催され、無数の文章が書かれてきたファン・ゴッホは、「狂気」「天才」「情熱」といった形容でもって生涯が伝説化してしまっており、作品も、そうした理解のもとで解釈されがちであった。我が国でも、白樺派以来、そうした傾向が根強い。そこで本展は、伝説化され、孤高の画家となってしまっていたファン・ゴッホの作品を、19世紀後半の文化・歴史の中で検証することで、画家の本当の姿を浮かび上がらせようとした。具体的には、ファン・ゴッホの作品と同時に、彼が所有していた、あるいは見知っていた作品や資料を展示することで、作品が成立した背景を、視覚的に明らかにすることを目指した。

実 績

1. 開会期間	平成17年3月23日～平成17年5月22日 (60日間, うち平成17年度は51日間)
2. 会 場	東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数	127件 / うち東京展出品は124点 (うち国宝 0件, 重要文化財 0件)
4. 主 催	東京国立近代美術館, NHK, NHKプロモーション, 東京新聞
5. 入館者数	474, 263人 (一日平均9, 299人) (平成17年度中目標 274, 000人)
6. 入場料金	個人 : 一般 1,500円 大学生 1,000円 高校生600円 団体 : 一般 1,100円 大学生 700円 高校生300円 前売 : 一般 1,200円 大学生 800円 高校生400円 割引 : 一般 1,100円 大学生 900円 高校生500円
7. 入場料収入	142, 300, 550円
8. 担当した研究員数	2人
9. 展覧会の内容	フィンセント・ファン・ゴッホの作品を、彼が所有していた、あるいは見知っていた作品・資料と同時に展示した。具体的には、画家となる以前に職業として目指していた宗教への関心、版画の収集などを通じて関心を深めていた労働者への関心(以上、オランダ時代)、印象派、フランス自然主義文学、浮世絵といった同時代の芸術一般の受容(以上、パリ時代)、ユートピアという19世紀的な思想の実践(アルル時代)、巨匠の作品の模写、そして自然の描写(以上、サン＝レミ、オーヴェール＝シュル＝オワーズ時代)に着目した。ファン・ゴッホ作品約40点、関連作家の作品約26点、資料関係約60点が展示された。
10. 講演会等 実施回数計	2回 / うち平成17年度開催1回 (年度計画記載回数: 講演会2回)

参加人数計 192人/うち平成17年度開催分110人
(詳細は、「(2)-2 講演会等の事業」参照)

11. 広報

共催者のNHK, NHKプロモーション, 東京新聞の協力で, 外部に広報事務所を設け, プレスリリースの作成・発送(2回), 記者内見会及び記者発表(2回)の開催, TVCM, ラジオCMの作成・出稿, 各美術館・各大学・公共施設等へのポスター・チラシの発送, 鉄道駅(JR, 東京メトロ, 地下鉄)へのポスターの掲出, 車内吊広告・電飾看板の掲示, チラシ配布, 大型書店との連携協力, 専門誌・一般誌の特集への編集協力, その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼(東京国立近代美術館) 2005年2-3月(第550号)「ファン・ゴッホを展示するということ」(アンドレアス・ブリューム, 保坂健二郎訳)

婦人画報 2005年2月号「東京国立近代美術館『ゴッホ展』開催記念特別企画 ゴッホの旅路」(無署名)

東京新聞 2005年2月25日「輝き増す 夜のカフェ」(大森雅也)

東京新聞 2005年3月16日~22日(夕刊)「天才ゴッホの素顔1~5」(森村陽子)

東京新聞 2005年3月22日「対峙で浮かび上がる魅力」(保坂健二郎)

しんぶん赤旗 2005年3月30日「おはようニュース問答 ゴッホ展, 彼の新しい面が発見できそう」

The Daily Yomiuri 2005年3月31日 “Breaking the legend’ of Vincent van Gogh” (Tom Baker)

美術手帖 2005年4月号「ファン・ゴッホ 孤高の画家の 現 風景 グローバル・メガ・マーケット時代のお色直し」(園府寺司), 「墓から展覧会へのシフト オーヴェールを訪れて」(保坂健二郎)

てんとう虫 2005年4月「『炎の人』は冷徹に現代人に警告する」(森村泰昌)

日経Masters 2005年4月号「浮世絵に見た日本への思い込みが『ゴッホたる作風』を形づくった」(小川敦生)

メンズジョーカー 2005年4月号「実は『孤高』ではなかった? 伝説的なアーティストの神話を解体」(木谷節子)

環境会議 2005年春号「環境の織物としての芸術作品 19世紀末のファン・ゴッホ」(保坂健二郎)

産経新聞 2005年4月3日「比較展で迫るゴッホの素顔」(岡本耕治)

日本経済新聞 2005年4月4日(夕刊)「名作の横顔 南仏で得た光と色彩」(律)

新聞之新聞 2005年4月4日「東京新聞など主催 ゴッホ展が開幕」

毎日新聞 2005年4月6日「今週の1点(黄色い家)」(永)

朝日新聞 2005年4月7日「新たなゴッホ 知る喜び」(木下長宏)

公明新聞 2005年4月12日「歴史に見いだされる“いま” ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展とゴッホ展」(藤田一人)

東京新聞(夕刊) 2005年4月12日「生命そのもの 絵に注ぐ」(黒川紀章), 4月13日「家庭と日本 2つの憧れ」(馬淵明子), 4月14日「明るい空 すべてが輝く」(太田治子), 4月18日「光のなかに一筋の不安」(高橋睦郎), 4月19日「自己解き放つ夜の命の躍動」(高橋克彦)

しんぶん赤旗 2005年4月13日「愛としての唯物的世界」(石川翠)

朝日新聞 2005年4月15日(夕刊)「ツウのひと声 100年先を行ってたゴッホ」(村田真)

毎日新聞 2005年4月20日(夕刊)「『ゴッホ展』を見て 強い訴求力の源泉とは」(高島直之)

社会新報 2005年4月20日「素描なども併せて一望できる」(二本松泰子)

The Asahi Shimbun 2005年4月22日 “Putting van Gogh in his place” (Michael Victor)

東京新聞 2005年4月23日「ゴッホ展に寄せて 歴史的文脈の中で見直すゴッホ」(園府寺司)

東京新聞 2005年4月27日(夕刊)「ゴッホ神話を考える」(三浦篤)

東京新聞 2005年4月30日「模写作品に興味」(横尾忠則), 5月1日「異彩を放つ『花魁』」(佐藤光信), 5月3日「不思議な力湧く」(村田さち子), 5月4日「真の個性が現出」(渡部葉子), 5月5日「研究深さ感じる」(石鍋裕)

The Japan Times 2005年5月4日 “Mad artist myth could no longer holds Vincent van Gogh in context” (Colin Liddell)

しんぶん赤旗 2005年5月15日(日曜版)「うずまき ぐるぐる」(結城昌子)
 埼玉新聞 2005年5月17日「ゴッホの『靴』」(矢内久子)
 読売新聞 2005年5月20日(夕刊)「手帳 画家ゴッホの実像を探る」(前田恭二)
 国立国際美術館ニュース 2005年6月(148号)「ファン・ゴッホ家の家計簿」(園府寺司)
 女性セブン 2005年6月2日「行ってきました ゴッホ展1万人大行列」
 日本経済新聞 2005年6月4日(夕刊)「二つの展覧会」(下重暁子)
 ジャポニスム研究 2005年(第25号)「『ゴッホ展 孤高の画家の原風景』 企画者自身による展評」(園府寺司)

13. アンケート調査

[展覧会]

調査期間 平成17年4月21日～平成17年4月24日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件(母集団474, 263人)有効回答数295件

アンケート結果 ・良い84.4%(249件)・普通13.9%(41件)・悪い1.7%(5件)

[講演会]

講演会 (回答数50件) ・良い76.0%(38件) ・普通20.0%(10件) ・悪い4.0%(2件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は、世界的なファン・ゴッホ研究者である園府寺司氏(大阪大学教授)と国立国際美術館、愛知県美術館、そして当館による共同企画である。作品選定、出品交渉、カタログ作成など、ほとんどすべての局面において共同して作業に当たった今回のケースは、大学など外部との共同作業の実践の一例とも言える。ファン・ゴッホが見知っていた作品資料を彼自身の作品と一緒に展示することで、ファン・ゴッホを伝説から引き離すという展覧会の目的も概ね成功したと考える。又、各種解説物は各担当者が、来館者層が多岐に渡ることを考慮に入れて、わかりやすく簡潔で、しかも見やすいかたちでの作成を心がけた。別に子ども用のセルフガイドとして作ったパンフレットも好評であった。

なお、通常、月曜日を休館日、金曜日を午後8時までの夜間開館日としているが、混雑緩和と観覧機会の確保の目的から、会期中は休まず開館(4月11日を除く)した。また、ゴールデンウィーク(4月29日～5月8日)中は毎日、5月9日以降は木・金・土・日を夜間開館とし、開館中は東京駅からシャトルバスを運行するなど、サービスの一層の向上に努めた。

講演会に関しては、ファン・ゴッホ研究の最前線にいるファン・ゴッホ美術館のチーフ・キュレーターと、日本におけるファン・ゴッホ研究の第一人者を招聘した。いずれも、専門的な見地に立ちながら、ファン・ゴッホがどんな技法を使っていたか、またファン・ゴッホはどのように受け取られてきたかを示すもので、「孤高の画家」とされてきた画家の実像を見せるという本展の企画意図に合致しており、評判も高かった。また、当館としては初めて教職員向けの研修会(2回)を行い、学校教育における美術鑑賞教育の一助になったと考える。

広報に関しては、展覧会開催3ヶ月前の12月上旬の段階で記者発表を行うことで、大型特集や紙面の確保に貢献できたと考える。また、NHKとの連携により、地方自治体の社会教育施設等で、ゴッホに関する講演会をのべ20回以上行い(うち当館スタッフが担当したのは7回)、展覧会の具体的な内容についての周知もすることができた。また、エントランスロビーにおけるラジオのニュース番組の生放送への対応(開館中)や、テレビ番組収録(閉館中)への対応など、各種メディアとの協力により、ライブ感のあふれるメッセージを伝えられたと考える。

【見直し又は改善を要する点】

来館者アンケートでは、キャプションに記載されている数字(カタログ番号)の順番どおりに作品が並んでいないので混乱する、あるいは、最後の方にある年譜パネルは最初に掲出してほしい、といった指摘があった。今後は、必要に応じ、変更を検討していきたい。また、額が作品に似合っていないことへの苦情が少なくなかった。借り手が自由にできる問題ではないが、その説明を適宜パネルのかたちなどですべきではなかったかと反省している。

また、ファン・ゴッホの作品以外が含まれているにも関わらず個展のように「ゴッホ展」と名づけていることへの批判が少なくなかった。本展が目指していたのが「ファン・ゴッホ」という画家がいかにより形成されたのかを見せることにある以上、関連資料の実物も展示することは必要であった。さらに、ファン・ゴッホのような作品の借用が極めて困難となっている世界的な情勢から考えれば、今回の出品点数とその質は高かったと思われるが、特定の作家以外の作品も多数含んだ個展であることの周知は、徹底すべきであったと考える。

講演会に関しては、混雑が予想される展覧会であり、混乱を避けることを第一に考え、積極的な広報を行わなかった。結果として、一部の人しか知りえないイベントとなった。今後、このような展覧会における講演会やイベントの運営方法については、より一層検討・工夫する必要がある。また、やや専門性の高い内容となったしまったため、入門的な講演会を設定するなど、プログラムの多様化についても検討したい。

広報に関しては、混雑情報をリアルタイムに提供することができなかった。共催者の東京新聞社ホームページや、日ごろ協力関係にある東京メトロ竹橋駅では情報を伝えたが、当館では、十分な体制を整えることができなかった。今後、情報システムの更新、携帯電話用サイトの開設など、サービスの向上に努めたい。また、会期前半への来場者の比重を高めて混雑を緩和させる工夫について、一部の美術館で行われている入館時間等による割引率の段階化など、これまで以上に弾力的に検討すべきと考える。

近代日本画の名匠「小林古径」展（共催展）

方 針

小林古径は1883(明治16)年に新潟県に生まれ、1914(大正3)年の第1回再興日本美術院展に「異端」を出品して同人に推挙され、その後、再興院展の中心的な画家として、1957(昭和32)年に亡くなるまで活躍した。近代日本画は、絶え間なく流れ込む西洋美術との葛藤を余儀なくされた。当然のことながら古径も、その問題の解決に腐心した画家の一人であったが古径の強靱ともいえる造形表現には、日本画、洋画といった区別を超えた絵画そのもののあり方をみいだすことができる。生涯にわたって絵画に本質的なものを追いつけた古径の歩みは、多くのことを示唆しているように思われる。この展覧会は代表作約120点を集めて、小林古径の画業の軌跡を辿るとともに、そうした大きく変化する時代の中で、古径の芸術が現代に問うているものをあらためて探ろうとした。

実 績

1. 開会期間 平成17年6月7日～平成17年7月18日(37日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 124件(うち国宝 0件, 重要文化財 1件)
4. 主 催 東京国立近代美術館, 日本経済新聞社
5. 入館者数 66,885人(一日平均1,808人)(目標40,000人)
6. 入場料金 個人 : 一般 1,200円 大学生 900円 高校生 500円
団体 : 一般 800円 大学生 600円 高校生 350円
前売 : 一般 1,000円 大学生 800円 高校生 400円
割引 : 一般 1,100円 大学生 850円 高校生 450円
7. 入場料収入 14,994,330円
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
この展覧会は代表作を網羅した約120点の本画と 約80点の下図スケッチ類とで構成される。第1章「明治 - 歴史画からの出発 - 」では、最初期作品から梶田半古のもとで制作された歴史画を中心に紹介する。第2章「大正 - ロマン主義の華やぎ - 」では、大正期に描かれた華やかな色彩の作品を紹介、第3章「昭和 - 円熟の古径芸術 - 」はさらに「生命への賛歌」、「花と実と - 自然を見つめて」、「人の姿 - 祈り/暮らし」に分けて構成し、古径の画業の軌跡を辿るとともに、各章ごとにトピックを設定し古径芸術の背景にあるものを探った。
10. 講演会等 実施回数計 2回 (年度計画記載回数: 講演会2回)
参加人数計 329人
(詳細は、「(2) - 2 講演会等の事業」参照)

11. 広報

共催者の日本経済新聞社の協力で、外部に広報事務所を設け、プレスリリースの作成・発送、記者内見会及び記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、営団地下鉄）へのポスターの提出、車内吊広告・電飾看板の掲示、チラシ配布、その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼（東京国立近代美術館） 2005年6-7月（第552号） 「小林古径展」によせて 小林古径 記念美術館からの発信」（笹川修一）、「晩年の小林古径 表装師川崎忠彦氏に聞く」（文責・古田亮）
美術の窓 2005年6月号（第268号）「再発見!!小林古径の美学」、「古径が今に伝えるもの」（尾崎正明）、「はるかに古径をおもう」（一井建二）
日本経済新聞 2005年6月15日 「私の一点 小林古径展から」（梅原猛）、6月16日 「私の一点 小林古径展から」（水原紫苑）、6月17日 「私の一点 小林古径展から」（森下俊三）、6月18日 「私の一点 小林古径展から」（福井爽人）
Herald Tribune The Asahi Shinbun 2005年6月17日 “Simplicity key to nihonga artist's works”（Jeff Michael Hammond）
新美術新聞 2005年6月11日 「小林古径展」（中村麗子）
朝日新聞 2005年6月24日（夕刊） 「極楽井」（山盛英司）
産経新聞 2005年6月25日 「小林古径展」（岡本耕治）
中日新聞 2005年7月6日 「近代日本画の名匠 小林古径展」（浅野徹）
日経おとなのOFF 2005年8月 「近代日本画の名匠 小林古径展」（梅原猛）
文化庁月報 2005年5月 「小林古径展」（尾崎正明）
月刊おとなりさん 「特集 小林古径」

13. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成17年6月30日～平成17年7月3日（4日間）
調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 300件（母集団66,885人）有効回答数297件
アンケート結果 ・良い94.6%（281件）・普通4.0%（12件）・悪い1.4%（4件）

[講演会]

講演会（回答数146件）・良い70.5%（103件）・普通23.3%（34件）・悪い6.2%（9件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

戦前期に活躍し、近代日本美術史上重要な役割を果たした作家たちの存在は、リアルタイムで彼らの活躍を眼にしていた世代が高齢化し、若い世代には作品を見る機会すらほとんどないという今日の状況で、近代美術館が積極的に近代画家をとりあげていくところみは、きわめて重大であると認識している。

この展覧会が古径の回顧展として際立っている点は、その代表作がほとんどすべて出品されていたということである。多くの代表作を所蔵する山種美術館の協力を得たのをはじめ、全国の美術館、さらには個人所蔵者から貴重な作品を借用できたことは、国立美術館としてのこれまでの実績によるものと考えられる。特色ある取組みとして、展覧会構成に工夫を加え、トピックとしてスケッチや下図などを取り混ぜて展示に変化をつけたことである。幸いにも予想を上回る来館者があり、古径芸術の再評価に

大きく貢献できたものと思う。

講演会について、今回は、日本画家の田淵俊夫氏を招き、主に技法上の観点から古径作品について語っていただいた。日本画には現在の私たちにとってなじみのない材料や技法が用いられていることから、そうした技術的な面を講演会によって補足することによって、鑑賞者によりいっそう日本画のよさを理解してもらえたと考える。画家ならではの作品理解や技法の問題など、貴重なご意見を伺う機会となった。

【見直し又は改善を要する点】

脆弱な日本画の場合、貸し出し条件として展示期間の制限がつく場合が少なくない。中には2週間みの展示というケースもある。また、今回は京都国立近代美術館への巡回があり、2会場を通して展示できる作品はわずかしかなかった。そのため、こまめな展示替えによって対応せざるを得ない状況となるが、一般の観客にとってはそもそも展示替えの必然性が理解されず、なぜ自分が来館したときに見たい作品が出ていないのか、という不満につながる。今後とも、展示替えは必要となるだろうが、観客への理解をもとめていく方法については改善の余地があると考ええる。

広報について、小林古径のように、一般の客層にとって馴染みのない作家の場合、また、日本画の展覧会ということで開催日数が少ない今回のような場合には、通常よりも早く広報活動を行っていく必要がある。今回は共催者である日本経済新聞社が積極的に広報活動を行ったとはいうものの、今後は、より迅速な広報戦略をたてていくことが必要と考える。

「アジアのキュビズム - 境界なき対話」展（共催展）

方 針

本展は、20世紀初頭にパリで起こったキュビズムの動向を、アジアの芸術家がいかに受け入れ、いかにそれに応えてきたか、という問題に焦点を当てた展覧会である。その際に、アジアにおける諸動向を、ヨーロッパの近代絵画の単なる受動的移入や模倣として見るのではなく、各地域の文化的土壌に根ざした創造的受容として捉えようというのが、基本の方針であった。アジアのほぼ全域を対象とするこの種の試みは前例がなく、また、総合的な調査・研究の蓄積も寡少であることから、主催者である3国立美術館（日本、韓国、シンガポール）及び国際交流基金は4度の合同調査を行い、各地の美術館・大学の研究者や美術批評家等から助言や資料提供を得ながら、展覧会の構成及び作家・作品の選定に当たった。

実 績

1. 開会期間 平成17年8月9日～平成17年10月2日（48日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 115件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
（他にヨーロッパの作例2件を特別出品）
4. 主 催 東京国立近代美術館，国際交流基金，韓国国立現代美術館，シンガポール美術館
5. 入館者数 11,356人（一日平均237人）（目標 8,000人）
6. 入場料金 個人：一般 650円 大学生 350円 高校生 200円
団体：一般 450円 大学生 200円 高校生 100円
前売：一般 550円 大学生 250円 高校生 150円
割引：一般 600円 大学生 300円 高校生 150円
7. 入場料収入 4,105,000円
8. 担当した研究員数 3人

9. 展覧会の内容

出品作品は、アジア11カ国（インド、インドネシア、ヴェトナム、シンガポール、スリランカ、タイ、大韓民国、中国、日本、フィリピン、マレーシア）の78作家による主に絵画作品122点（東京展出品は75作家115点及び特別出品2点）である。日本を例外として、アジア諸国におけるキュビズム受容（より一般的にはモダニズム芸術受容）のピークは、おおむね植民地からの独立前後の時期に当たっており、出品作の制作年は、それぞれの地域の歴史や国情に応じて1910年代から1980年代初頭という広範囲に及んでいる。また、本展のねらいは必ずしも国別の受容史ではなく、「アジアのキュビズム」という見方が成立しうるか否か、その可能性や有効性を問うものであることから、全体を、キュビズム的動向の指標に照らして、「第1章 テーブルの上の実験」「第2章 キュビズムと近代性」「第5章 身体」「第4章 キュビズムと国土（ネーション）」の4つの章に分けて構成した。

10. 講演会等 実施回数計 4回(年度計画記載回数:講演会及びギャラリートーク5回)
参加人数計 169人
(詳細は、「(2)-2 講演会等の事業」参照)

11. 広報

プレスリリースの作成・発送,記者内見会及び記者発表の開催,各美術館・公共施設等へのポスター,チラシの発送,鉄道駅(京王線, JR, 東京メトロ)へのポスター掲出,ホームページ上での展覧会紹介,その他雑誌・新聞・テレビ等による取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼(東京国立近代美術館) 2005年6-7月号(No.552) 展覧会予告(松本透)
民団新聞 2005年7月27日 展評(無署名)
The Japan Journal 2005年7月(Vol.2, No.4) 展評(無署名)
東洋経済日報 2005年8月12日 展評(無署名)
日本経済新聞 2005年8月19日 「文化往来」(無署名)
朝日新聞 8月25日(夕刊) 展評(山盛英司)
メトロ(Metro) 2005年8月26日(No.596) “Cubism in Asia: Unbounded Dialogues—Regional Cubist Works Come Out of the Box” (Jeff Michael Hammond)
東京新聞 2005年8月27日 展評(藤田一人)
美術画報 2005年8月(No.48) 展評(無署名)
現代の眼(東京国立近代美術館) 2005年8-9月号(No.553) 「一九七八年アジアへの旅/アジアのキュビズム展に想う」(後小路雅弘),「キュビズムの意味」(本江邦夫)
新美術新聞 2005年9月1日(No.1065) 展覧会紹介(松本透)
日本経済新聞 2005年9月4日 展評(律)
読売新聞 2005年9月6日(夕刊) 展評(前田恭二)
週間新潮 2005年9月8日(無署名)
赤旗 2005年9月9日 展評(金子徹)
中日新聞 2005年9月14日 展評(浅野徹)
読売新聞 2005年9月14日(夕刊) 作品解説(松本透)
The Asahi Shimbun 9月16日 展評(Akira Jan Fors)
高知新聞 2005年9月19日 展評(無署名)
毎日新聞 2005年9月20日(夕刊) 展評(三田晴夫)
公明新聞 2005年9月30日 「アジアでの展開でみえた可能性 - アジアのキュビズム 展」(中島芳郎)
中央公論 2005年9月号 展評(住友文彦)
遠近第7号 2005年10月1日 「打ち込まれた無数の楔 - アジアのキュビズム 展を観て」(水沢勉)
芸術新潮 2005年10月号 「触覚的楽天的キュビズムからアジアを見る」(サワラ木野衣)
美術手帖 第871号 2005年10月号 「亜細亜的立方体主義 翻訳・転換・交通 - アジアのキュビズム 展」(田中正之)
現代の眼(東京国立近代美術館) 2005年10-11月号(No.554) 「国際シンポジウムアジアのキュビズム」(松本透)
読売新聞 2005年12月7日(夕刊) 「回顧2005 美術」(前田恭二)
日本経済新聞 2005年12月19日 「回顧2005 美術」(白木緑)
毎日新聞 2005年12月20日(夕刊) 「この1年 美術」(三田晴夫)

13. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成17年9月1日～平成17年9月4日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し,記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 300件(母集団11,356人)有効回答数293件
アンケート結果 ・良い73.4%(215件)・普通23.9%(70件)・悪い2.7%(8件)

[講演会]

ギャラリートーク
(回答数51件)・良い96.1%(49件)・普通3.9%(2件)・悪い0.0%(0件)

自己点検評価

【良かった点,特色ある取組み】

本展は,実地調査から全体構想の立案や出品作家・作品の選定まで,すべての作業を海外の2美術館を含む4機関及び大学の研究者3名(多摩美術大学教授(当時)・建畠哲,九州大学教授・後小路雅弘,上智大学助教授・林道郎)の共同で行い,東京展ののちソウル,シンガポールへと巡回した。国際交流という点でも,他機関との連携という点でも,これまでにない取組みであった。なお,当館は,キュビズム絵画の受容と変貌を比較・検証する試みとして,1976年にヨーロッパ及び日本人作家の作品による「キュビズム展」を開催しており,本展はこの視点をアジア全域へと広げたものともいえる。

キュビズムの動向を国別や編年体ではなく,テーマやモチーフの視点から分類して編成した点は,本展の構成上の特色である。アンケート調査の「展覧会感想」によると,「大変良かった」と「良かった」の合計は73.4%と高く,全体として好感をもって受け取られたと見てよいと思う。また,主要新聞・美術雑誌を始めとして,非常に多くの展覧会評や特集記事等で採り上げられたことも,本展が一定の成果を収めたことの印しと考える。

講演会に関しては,「アジアのキュビズム」というテーマ自体,一般になじみの深いものではないため,本展では学術的な講演会ではなく,第三者的研究者と企画立案に参加した研究者,及び画家と当館担当者によるトークイベント2回を開催した。聴講者数は110人に止まったが,アンケートの「参加感想」は「大変良かった」と「良かった」の合計が95.3%(男性は100%)であり,満足度は高かったと考える。

広報に関しては,新聞・雑誌等による紹介記事や展覧会評等は,一定の広報・宣伝力をもつものと考えられ,本展が掲載記事(上掲)に恵まれた点は良かった点である。なお,本展では,美術館による通常の広報活動のほか,アジア出品国の在京公館等への広報を国際交流基金が分担して行った。

【見直し又は改善を要する点】

「キュビズム」は近代美術史上きわめて重要な動向であるが,この名称自体,一般の入館者に広く知られているものとはいえず,加えて,我が国ではこれまでアジアの近代美術を鑑賞する機会がきわめて少なかった。また,地域や時代の別を解消して,全体をテーマに即して構成することによって,分かりやすさが損なわれる可能性も否定できなかった。そのため東京展では,ヨーロッパのキュビズムの典型作としてピカソ,ブラック各1点を展示して,来館者の参考に供し,また,章解説や図表,作品グループの解説のほか,国別の総合年表やアジア地図(出品作品分布図)などを掲示した。しかし,アンケートの「キャプション評価」では,「大変わかりやすい」と「わかりやすい」の合計が58.0%と,上記「展覧会感想」よりかなり低く,この点についてはもう一段の工夫が必要であったと思われる。

展覧会場が混雑するおそれの少ない本展のような展覧会こそ,ギャラリートーク等,会場内での解説プログラムを活かす好機会であったともいえる。本展でのギャラリートーク実施数は2回にとどま

たが、この種の関連イベントについては、展覧会の性格に応じて実施回数を増やすなど、機動性をもって当たりたい。

「アジア」、「キュビズム」の両語とも、必ずしも一般受けの望めるものではなく、広報活動については打つ手にあぐねたのが実情である。また、本展については、同種の展覧会例が皆無に近いこともあって、入館者層（年齢、性別、社会人・学生の別など）を想定するデータが乏しく、広報戦略を立てるのが非常に難しかった。そのため、本展の広報活動が通常のその域を出なかったことは残念な点である。

「ドイツ写真の現在 かわりゆく『現実』と向かいあうために」展（共催展） 方 針

ドイツの現代写真は、1990年代以降、高い評価を得てきた。「類型学」と呼ばれる手法を用いるベルント&ヒラ・ベッヒャーや、彼らに学んだデュッセルドルフ芸術アカデミー出身の写真家たちを中心に、その客観的・分析的な写真表現は、現代美術の分野で国際的に大きな存在感を示した。一方、東西再統一以降15年を経て、その社会的変容を反映した作品や、旧東独出身の新世代の登場、またデジタル技術の進展による写真表現の変化など、新たな展開も注目されている。本展では、そうした90年代以降のドイツ写真の状況を、変化する「現実」に対する、多様な取り組みという観点から捉え直し、最新の動向を含めて紹介することを目指した。なお、本展は、「日本におけるドイツ年 2005/2006」参加事業として企画され、ドイツ、ミュンヘンのピナコテーク・デア・モデルネより企画・出品に関して全面的な協力を得た。

実 績

1. 開会期間 平成17年10月25日～平成17年12月18日（48日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 51件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 主 催 東京国立近代美術館，京都国立近代美術館，東京ドイツ文化センター，読売新聞社
5. 入館者数 25,887人（一日平均539人）（目標 16,000人）
6. 入場料金 個人：一般 650円 大学生 350円 高校生 200円
 団体：一般 450円 大学生 200円 高校生 100円
 前売：一般 550円 大学生 250円 高校生 150円
 割引：一般 600円 大学生 300円 高校生 150円
7. 入場料収入 9,443,800円
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
 展覧会は二部構成とし、第一部では90年代以降のドイツ写真を代表する作家としてベルント&ヒラ・ベッヒャー、ミヒャエル・シュミット、アンドレアス・グルスキー、トーマス・デマンド、ヴォルフガング・ティルマンズの5作家、第二部では近年注目され始めた新世代から、ハンス＝クリスティアン・シンク、ハイディ・シュペッカー、ロレッタ・ルックス、ベアテ・ゲーチョウ、リカルダ・ロッグンの5作家をそれぞれ紹介した。
10. 講演会等 実施回数計 5回（年度計画記載回数：講演会及びギャラリートーク4回）
 参加人数計 450人
 （詳細は、「(2)-2 講演会等の事業」参照）
11. 広報
 プレスリリースの作成・発送，記者内見会及び記者発表の開催，各美術館・公共施設等へのポスター，

チラシの発送，鉄道駅（京王線，JR，東京メトロ）へのポスター掲出，ホームページ上での展覧会紹介，その他雑誌・新聞・テレビ等による取材への対応などを行った。また「日本におけるドイツ年 2005/2006」事務局を通じての広報，同参加展覧会との広報の相互協力を行ったほか，横浜トリエンナーレ・スタンブラー企画に参加した。

12．展覧会関連新聞・雑誌記事等

TIME Asia edition September 26, 2005 “The Tempo of a nation” (Colin Pantall)
読売新聞 2005年10月12日(夕刊) 「ドイツ写真の現在展 東西統一 花開いた新世代」(増田玲)
日本カメラ 2005年11月号 「ドイツ写真の現在 - かわりゆく「現実」と向かいあうために&アウグスト・ザンダー展 写真を通して異文化に触れる絶好の機会」(上野修)
美術手帖 2005年11月(第872号) 「ドイツ写真の現在 インタビュー+作家解説」(保坂健二郎他)
産経新聞 2005年11月2日 「多様な方法で鑑賞者揺さぶる」(岡本耕治)
日本写真協会会報 2005年11月1日(第423号) 「人気のドイツ現代写真に迫る」(聞き手・平木収)
芸術新潮 2005年12月号 「眺める少女の眺め ロレッタ・ルックス《窓辺にて》」(無署名)
エスクァイア日本版 2005年12月号 「Art Walk 「ゲルハルト・リヒター」& 「ドイツ写真の現在」& 「シュテファン・バルケンホール」 同時代という横軸で共鳴する，ドイツ現代アートの秋。」(新川貴詩)
ミュージック・マガジン 2005年12月号 「客観性へのこだわりが変化する」(鳥原学)
STUDIO VOICE 2005年12月1日(Vol.360) 「『そこ』から『ここ』へ 犯行現場としてのドイツ写真」(竹内万里子)

13．アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成17年11月10日～平成17年11月13日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し，記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 300件(母集団25,887人)有効回答数293件
アンケート結果 ・良い77.1%(226件)・普通21.2%(62件)・悪い1.7%(5件)

[講演会]

ギャラリートーク
(回答数69件) ・良い88.4%(61件) ・普通8.7%(6件) ・悪い2.9%(2件)

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

ドイツでも有数の現代写真コレクションをもつピナコテーク・デア・モデルネの協力を得られたことにより，二部構成のうち，現代ドイツを代表する写真家たちのパートでは，彼らの代表作を含む，高水準の展示が実現できた。21世紀に入ってから動向を紹介するパートは，作品点数は限られていたとはいえ，5人の作家はすべて日本で初の作品展示であり，そのうちの2作家を招いてのギャラリートークには，想定以上の観客が来場するなど，一般から高い関心に応えたという意味でも，意義ある機会となったと考える。

また，本展は20代を中心とする若年層の来館者の割合が高く，アンケート回答者の37.5%が初来館であるなど，新たな観客の開拓として，今後につながるものと期待する。

なお，今回はドイツ写真の歴史的な展開を紹介することで，本展への理解を一層深められるよう，ドイツ近代写真を代表する写真家アウグスト・ザンダーを取り上げた特集展示(同展の項目参照)の同時

開催に加え、所蔵品ギャラリーにおいてもドイツ近代写真に関する小特集を併催した。

出品作家のうち3人を共催者である東京ドイツ文化センターの協力を得て招聘し、それぞれ講演会(1名)、ギャラリートーク(2名)を依頼した。作家自身の言葉を聴ける、こうしたプログラムへの関心・ニーズは高く、今回も多くの参加者を得られたことは意義があった。一方、担当研究官によるギャラリートーク(3回)は、ギャラリーツアー形式で展覧会全体を解説するプログラムとして、作家による講演・ギャラリートークとの差異化を図った。こちらについても各回とも多数の参加者を得られた。

プレスリリースは開会2ヵ月前作成の通常版に先立ち、開会4ヶ月前に簡易版を作成・発送した。同時開催の「アウグスト・ザンダー」展は、企画内容も関連性が高いことから、ポスター、チラシ、プレスリリースを共通化した。「日本におけるドイツ年 2005/2006」参加企画のうち、近隣で開催の二つのドイツ現代美術展(東京オペラシティアートギャラリー「シュテファン・バルケンホール」展、川村記念美術館「ゲルハルト・リヒター」展)と連携し、チラシに相互割引券をつける広報協力を行った。こうした関連企画との連携は、メディア側への話題の提供として効果があり、多くの紹介記事の掲載へとつながった。また横浜トリエンナーレ・スタンプラリーに参加し、専用スタンプを設置するとともに共通の広報ビデオを会場出口で上映した。

【見直し又は改善を要する点】

今回の展覧会は、ドイツの現代写真のうち、とりわけ現代美術の文脈で高い評価を得てきた作品を中心に取り上げたこと、また、デジタルテクノロジーへの転換期における新しい写真表現の試みを多く含んでいたことから、従来の「写真」の展覧会を期待して来館した層からは十分な理解・共感を得られなかった面があることが、世代別のアンケートの回答等から窺えた。本展に限らず、現代美術の紹介における共通する問題・反省点として、展覧内容や個々の作品についての、より適切かつ平易な解説の方法等、今後の企画において継続的に改善を図りたい。

作家の講演・ギャラリートークについては、来日スケジュールの調整の都合で、広報した時期が短期間であったにもかかわらず、多数の参加者があり、とりわけギャラリートークは作品を前にした会場内での聴講者数としてはほぼ限界に近い状況となった。広報の時期・方法や申込み制の導入等の判断など、今後ともノウハウを蓄積し、より適切なプログラムの実施に努めたい。

簡易判プレスリリースの作成は、より早い情報提供という点で効果があったが、反面、二度手間という点は否めない。リリースの電子化なども含め、より労力・費用を削減しつつ、早期に外部への情報提供を行える方策を考えたい。また、同時開催の「アウグスト・ザンダー」展は、広報を共通化したことは前項で述べたとおりであるが、特にプレスリリースで情報の整理が十分とは言えない面があり、掲載記事広報の上で若干の混乱が生じた。今後のプレスリリースの作成において改善の参考としたい。

「アウグスト・ザンダー」展（特集展示）

方 針

アウグスト・ザンダー（1876-1964）はワイマール時代のドイツの人々を撮影した膨大な肖像写真の仕事で知られる。ザンダーはあらゆる階層や職業の人々の肖像によって、ドイツ社会を包括的に描き出す「20世紀の人間」という壮大なプロジェクトに取り組んだ。その構想は未完に終わるが、見取り図として発表された1929年の写真集『時代の顔』は、当時のドイツ美術における新即物主義の潮流ともあいまって大いに注目され、客観的で即物的な描写のスタイルは、その後の写真表現に大いに影響を与えた。本展ではその写真集『時代の顔』をとりあげ、あらためてザンダーの仕事の見直す機会とした。

実 績

- 1．開会期間 平成17年10月25日～平成17年12月18日（48日間）
- 2．会 場 東京国立近代美術館本館 ギャラリー4
- 3．出品点数 61件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
- 4．主 催 東京国立近代美術館
- 5．入館者数 26,200人（一日平均546人）（目標 16,000人）
- 6．入場料金 個人：一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
団体：一般 210円 大学生 70円 高校生 40円
- 7．入場料収入 常設展に含まれる
- 8．担当した研究員数 2人
- 9．展覧会の内容
今回の展覧会では、現在ザンダーのアーカイブが置かれているドイツ、ケルンのSK文化財団所蔵の作品により、写真集『時代の顔』に収められた60点全てのイメージを、写真集どおりの構成により展示した。また、ザンダーのセルフ・ポートレイトを参考出品した。加えて各作品のキャプションと展示室内で無料配布した解説パンフレットにより、ザンダーが最終的に構想していた未完のプロジェクト「20世紀の人間」との連関を示した。
- 10．講演会等 実施回数計 2回（年度計画記載回数：ギャラリートーク1回）
参加人数計 210人
（詳細は、「（2）-2 講演会等の事業」参照）
- 11．広報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会及び記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター、チラシの発送、鉄道駅（京王線、JR、東京メトロ）へのポスター掲出、ホームページ上での展覧会紹介、その他雑誌・新聞・テレビ等による取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

装苑 2005年11月号 「アウグスト・ザンダー展：アウグスト・ザンダー『時代の顔』」（増田玲）

日本カメラ 2005年11月号 「ドイツ写真の現在 - かわりゆく「現実」と向かいあうために&アウグスト・ザンダー展 写真を通して異文化に触れる絶好の機会」（上野修）

Pen 2005年12月1日 (No.165) 「人物の生業を、ザンダーは精密に写しとった。 - シュテファン・バルケンホール」（無署名）

13. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成17年11月24日～平成17年11月27日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し，記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件（母集団26,200人）有効回答数295件

アンケート結果 ・良い76.6%（226件）・普通20.3%（60件）・悪い13.1%（9件）

[講演会]

講演会

（回答数39件）・良い82.1%（32件）・普通17.9%（7件）・悪い0.0%（0件）

ギャラリートーク

（回答数9件）・良い66.7%（6件）・普通11.1%（1件）・悪い22.2%（2件）

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

本展は小規模ではあったが，写真史上に残るアウグスト・ザンダーの記念碑的な写真集を，展覧会として忠実に再構成するものであり，それ自体十分に見応えのある展示を実現できた。加えて現代のドイツ写真を紹介する「ドイツ写真の現在」との同時開催により，それぞれの展覧会が互いに補完しあい，相乗効果として，より幅広い視点や理解への手がかりを提供できたと考えている。

外部の講師による講演会と担当研究官によるギャラリートークをそれぞれ1回ずつ開催した。後者では，ギャラリートークという形式を利用し，関連する写真集などを紹介し，トーク終了後に実際に参加者が手にとって鑑賞することができる時間を設けた。

【見直し又は改善を要する点】

本展を開催した「ギャラリー4」を含む所蔵品ギャラリーについては，企画展のチケットで当日に限り，併せて鑑賞できることになっているが，時間的な制約から，後日あらためて再入場を可能にしてほしいという要望は，これまでも多く寄せられている。特に今回のように関連性の高い企画を併催する場合には，会期中の再来館者への入場料の減免等，より利用しやすいシステムへのニーズが高いことが，アンケートの回答等から窺われた。

同時開催の「ドイツ写真の現在」と合わせ，会期中に計7回の講演会・ギャラリートークを実施したが，いずれもそれぞれの展覧会についてのものであり，二つの展覧会を併せて紹介するような形のプログラムは実施できなかった。今回のような関連企画の併催に当たっては，それぞれの企画を併せて取り上げるようなプログラムの実施についても検討すべきであった。

「須田国太郎」展（企画展）

方 針

須田国太郎（1891 - 1961）は京都生まれ、京都帝国大学で美学美術史を学びながら関西美術院でデッサンを修めた。その後大学院に進学、1919年には絵画理論と実践の総合を求めべく渡欧して、主にスペインのプラド美術館で、ヴェネチア派の絵画の色彩表現やエル・グレコの明暗対比の技法を独学する。1923年に帰国後は、美術史を講じるかたわら制作に励み、41歳を迎えた1932年、東京銀座の資生堂画廊で初めて個展を開いた。これを機に、翌年、独立美術京都研究所の開設に伴い、学術面の指導者として招かれ、1934年には独立美術協会会員となって制作活動も本格化、渡欧で得た成果を糧に独自の重厚な作風を確立した。今回の展覧会では、こうした須田の画業が通覧でき、かつ、須田芸術を多面的に捉えることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成18年1月13日～平成18年3月5日（45日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 154件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 入館者数 22,673人（一日平均 504人）（目標 19,000人）
5. 入場料金
個人：一般 830円 大学生 450円 高校生 250円
団体：一般 560円 大学生 250円 高校生 130円
前売：一般 700円 大学生 350円 高校生 200円
割引：一般 780円 大学生 400円 高校生 220円
6. 入場料収入 13,027,610円
7. 担当した研究員数 1人
8. 展覧会の内容
須田の画業が通覧できるよう、「1932年 第1回個展」、「1933年 1944年 戦前」、「1945年 1961年 戦後」の3章によって通史的に全画業をたどり、続く「珠玉の小品」、「能・狂言」の2章によって須田芸術を多面的に捉える構成とした。
9. 講演会等 実施回数計 4回（年度計画記載回数：講演会2回）
参加人数計 257人
（詳細は、「（2）-2 講演会等の事業」参照）
10. 広 報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会及び記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、東京メトロ）へのポスターの提出、チラシ配布、その他雑誌・新聞への広告、記事掲載。各メディアへの取材対応などを行った。

11. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

新美術新聞 2005年12月1日 「須田国太郎展」(島田康寛)

日経新聞 2006年1月18日(朝刊) 「奥底から心揺さぶる魔術」(竹田博志)

読売新聞 2006年2月1日(夕刊) 芥川記者の展覧会へ行こう(芥川喜好)

Herald Tribune The Asahi Shinbun 2006年2月17日 “Dark visions infused with a magic lightness”
(C.B.Liddel)

12. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成18年2月9日～平成18年2月12日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し, 記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件(母集団22,673人)有効回答数296件

アンケート結果 ・良い91.2%(270件)・普通8.4%(25件)・悪い0.3%(1件)

[講演会]

講演会

(回答数50件)・良い82.0%(41件)・普通16.0%(8件)・悪い2.0%(1件)

ギャラリートーク

(回答数29件)・良い100.0%(29件)・普通0.0%(0件)・悪い0.0%(0件)

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

展覧会構成は,すでに京都国立近代美術館で開催された同展と基本的に同じであったが,当館の展示室の特徴から,いくつかの取組みを行った。ひとつは,前半3章の画業通覧的な展示に関しては,人物,風景,動物,植物など,テーマによってグループをつくり,展示が単調にならないよう配慮した。また,仮設壁の設置に当たってコの字型のスペースをつくり,作品にじっくりと向かい合えるような雰囲気作りを心がけた。また,後半の4,5章に関しては,あえて展示順を逆転させた。珠玉の小品を最後にすることで,能狂言デッサンが付随的なものに見えることを避けるためである。

2回行われたギャラリートークには,予想以上の参加者が集まった。今回の展覧会は熱心な須田芸術愛好者に好評を得ただけでなく,須田について知識のなかった一般の観客にも須田芸術のすばらしさを体感してもらう意義ある機会となった。

また,今回の特色のひとつでもあった能狂言デッサンのまとまった展示によって,これまで知られていなかった須田の一面を紹介することができた。これについては,大阪大学附属図書館の協力により,ロビーにて須田と能狂言に関するビデオ・プログラムを上映した。

本展の企画を担当した,須田国太郎研究の第一人者である島田康寛氏(京都国立近代美術館)の講演のほか,特色ある取組みとして,展覧会の特別協力者でもある大阪大学が,講演会についても共催し,同大学教授で附属図書館副館長である天野文雄氏が「須田国太郎 能・狂言デッサンの世界 能と絵画の至福の出会い」と題する講演を行った。この講演は,同大学附属図書館が所蔵する須田国太郎の能・狂言デッサンについて,能楽研究を専門とする天野氏がそれらの近代能楽資料としての重要性,希少性を明らかにするものであり,有益であった。

広報として,これまでほとんど行ってこなかった展覧会告知方法として,美術館裏手の高速道路側にバナーを掲示して広報に努めた。須田国太郎は,比較的地味な画風であるため,各種メディアに取りあげられた件数は多くはなかったが,NHKの「新日曜美術館」が45分枠で番組を制作したほか,館の

予算で『サンデー毎日』及び『東京人』に広告を掲載した。

【見直し又は改善を要する点】

今回の展示に当たっては、会場ではパネルによる章解説及び年譜を掲示したほか、リーフレットによる章解説を配布した。須田の作品は比較的わかりやすい具象絵画であるため、解説面において特別の配慮・工夫はしなかったが、東京では初公開となる能狂言のデッサンについては、描かれた演目に関する解説を提示するなど、いま一段の工夫が必要であったかもしれない。

2回の講演会ともに70人を超える参加者があり盛況であったが、天野氏の講演については、大阪大学の特別協力により、ポスターやチラシが制作されたにも関わらず、予想したほどの参加者をみなかったことを反省材料としたい。国文学・能楽関係者に重点的に案内物を送付するなど、講演主題にふさわしい広報活動の実施を検討したい。

広報の効果（観覧の動機、認知経路等）は、数字として評価することがきわめて難しい。本展の場合、NHKによる番組放映が大きな影響力を持ったことは、アンケートによる「認知経路」においてテレビが30%の高率を示していることから判るが、新しい試みである雑誌での広告掲載等の効果については、追跡調査が困難であるのが実情である。本展に限ったことではないが、広告戦略の立案や、その効果の確認等については、将来的には専門の機関への委託等を検討すべきであると考え。

「藤田嗣治」展（共催展）

方 針

知名度は抜群ながら、さまざまな問題から長年展覧会の実現が見送られてきた藤田嗣治の全画業を紹介する、初めての展覧会である。これまで、ともすると波乱万丈の人生を中心に語られてきた藤田だが、本展覧会は、もう一度作品に即してこれを見直すことで、新しい藤田像を示すことを試みた。国内外から集めた97点の作品に加え、藤田遺愛の品など資料13点を展示する。カタログには詳細な年譜と文献目録を付し、展覧会とあわせ、全体で今後の藤田研究の基礎となるよう内容の充実を図った。

実 績

1. 開会期間 平成18年3月28日～平成18年5月21日（50日間）
平成18年3月28日～平成18年3月31日（平成17年度4日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 97件，資料13点（うち国宝 0件，重要文化財 0件）
4. 主 催 東京国立近代美術館
共 催 NHK，NHKプロモーション，日本経済新聞社
後 援 外務省，フランス大使館
5. 入館者数 16,024人（一日平均4,006人）（平成17年度中目標 8,000人）
6. 入場料金 個人：一般 1,300円 大学生 900円 高校生 500円
団体：一般 900円 大学生 600円 高校生 350円
前売：一般 1,100円 大学生 800円 高校生 400円
割引：一般 1,200円 大学生 850円 高校生 450円
ペアチケット：1,800円
7. 入場料収入（平成18年度に算定）
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
「乳白色の肌」で成功を収めた1920年代のパリ時代、中南米旅行から日本へ戻り、戦争画も描いた1930 - 40年代、そして宗教画や子ども像を描いた1950 - 60年代。各時代の代表作を過不足なく示し、藤田の全体像を作品の変化を通して感じ取れるよう、作品選定に留意した。会場のパネルや解説類には、本展のための調査で発見された新しい知見を、わかりやすく、視覚的にも読みやすいかたちで示すようこころがけた。また、小中学生向けに「こどもセルフガイド」を作成した。
10. アンケート調査（平成18年度で実施予定）

独立行政法人国立美術館所蔵巡回展「名作とは何か？」

方 針

当館及び京都国立近代美術館の所蔵作品の油彩，日本画，彫刻の名作68点により，日本近代美術の流れを紹介し，日本近代美術の名作を通して名作の意味を考えることを目指した。

実 績

1. 会 場	愛媛県美術館 宮崎県立美術館
2. 開催時期	平成17年6月24日(金)～平成17年7月31日(日) 平成17年8月10日(水)～平成17年9月11日(日)
3. 主 催	東京国立近代美術館，愛媛県美術館 東京国立近代美術館，宮崎県教育委員会，宮崎県立美術館
後 援	愛媛新聞社，NHK松山放送局，南海放送，テレビ愛媛，あいテレビ， 愛媛朝日テレビ，FM愛媛，愛媛CATV 実行委員会を組織し，テレビ局と共催で開催 (実行委員会名：国立美術館展実行委員会，テレビ局名：UMKテレビ宮崎)
4. 出品点数	， 68件
5. 入館者数	5,133人 10,785人 合計 15,918人(平成12年度実績：2回 11,959人)
6. 入場料金	一般500円/大学・高校生250円/小・中学生150円/高齢者250円 一般800円/小・中・高生300円
7. 担当した研究員数	1人
8. 展覧会の内容	明治中期から大正・昭和の近代日本を代表する68作家の日本画・洋画・彫刻68点を「ゆるやかな近代化」「アカデミズムと個性」「日本化と成熟」「前衛の系譜」の4つのセクションに分けて、東京国立近代美術館と京都国立近代美術館の所蔵作品によって紹介した。
9. 講演会等	1回 40人 講師：東京国立近代美術館美術課長 中林和雄 1回 83人 講師：東京国立近代美術館主任研究官 藏屋美香
10. 広 報	ポスター、チラシを中心とする広報、新聞広告、看板広告、放送、パブリシティー情報掲載、等

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今回は展覧会の基本的な枠組みと構成に、開催各館の学芸スタッフが従来に増して深く関わっていた。 「名作とは何か」という展覧会タイトルには、単なる「名品展」という位置づけに留まらずに、近代日本美術史上の様々な価値観の形成を客観的に検証したいという積極的な意図が表れている。 一方では日頃図版などのみで知っていた作品が地元で実際に見れたことについて、来館の方々から好評をいただいた。

【見直し又は改善を要する点】

重要文化財などを含む、両館の重要作品を2館に巡回させる調整はかなり難しく、また日本画については保存上展示期間が限られるため、全面的には開催館の要望にこたえ切れなかった。独法内4館が出品できるような企画内容が運営上は望ましいといえる。

工芸館

「常設展」

方 針

工芸館常設展は、1. 明治以降、およそ百年の工芸・デザインの歴史的な流れを紹介する展示「近代工芸の百年」、2. 陶磁、漆芸、金工など、各素材別の名品を展示する「近代工芸の名品」、3. 各時代の特色、特徴的な工芸運動、花や動物などのモチーフなどをテーマにした「テーマ展示」の、3つの柱によって行っている。また、昨年度以来、年間を通して、当館所蔵の名品を鑑賞できるように六つある展示室の一室を「人間国宝・巨匠コーナー」とし、展覧会の企画内容に関わらず、常時工芸館の名品紹介を行い、当館のコレクションを通じて、近代の工芸及びデザインの魅力に触れる機会を提供するよう努めてきた。現在ではこれらの柱による展示を基礎としながら、小中学生から高齢層まで、また一般の観客からコレクター、作家など、専門性の強い観客まで、いかに幅広い層の関心を引き、広く工芸館をアピールできるかが課題である。

そのため17年度では、3つの柱を基本にしつつ、それをいかに噛み砕くかに努力して展示のテーマ、構成を考える。さらに昨年度から開始したボランティアガイドスタッフによる作品に触るコーナーを連動させ工芸品のより深い理解を図る。

実 績

1. 常設展開催状況

平成17年3月8日～平成17年4月17日「1 人間国宝の花 / 2 近代工芸の百年」

(38日間 / うち平成17年度16日間)

出品点数：115点(うち重要文化財 0点)

平成17年4月26日～6月26日(55日間)「近代日本の型染」

(同時期に「伊砂利彦 型染の美」展を開催したため、スペースが限られた。)

出品点数：17点(うち重要文化財 0点)

平成17年7月5日～9月4日「こども工芸館 動物とあそぼう」(55日間)

出品点数：67点(うち重要文化財 0点)

平成17年12月10日～18年3月5日「近代日本工芸の百年」(71日間)

出品点数：76点(うち重要文化財 0点, 登録美術品 1点)

平成18年3月14日～平成18年5月21日「花より工芸：新収蔵作品を中心に2001 - 2005」

(62日間 / うち平成17年度16日間)

出品点数：97点(うち重要文化財 0点)

各常設展には「人間国宝・巨匠コーナー」を併置した。常に所蔵作品や寄託作品の名品を見ることができこのコーナーでは、陶磁、染織、漆工、人形など、様々な分野の人間国宝などに加え、ルネ・ラリック、バーナード・リーチ、ルーシー・リーなどの作品、また、バウハウスやロシア・アヴァンギャルドの陶磁器など、欧米の巨匠作品、著名デザイン作品も幅広く紹介した。又、海外作家の作品を前に、イギリスの現代陶芸研究者によるギャラリー・トークを開催した。

平成17年度 計 212日間(所蔵作品展のみの開催期間 157日間)

2. 会場 工芸館 2階

3. 入館者数 66,263人 (常設展目標入館者数 33,000人)

(うち常設展のみ入館者数 36,889人)

4. 入場料金 一般200円 大学生70円 高校生40円
一般(団体)100円 大学生(団体)40円 高校生(団体)20円

5. 入場料収入 4,226,080円(含「伊砂利彦」展)

6. アンケート調査

第1回

調査期間 平成17年8月4日～平成17年8月7日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し, 記述式

アンケート回収数 300件(母集団 8,841人)有効回答数299人

アンケート結果

・良い83.3%(249件)・普通16.1%(48件)・悪い10.6%(2件)

第2回

調査期間 平成18年1月19日～平成18年1月22日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し, 記述式

アンケート回収数 300件(母集団26,382人)有効回答数 296件

アンケート結果

・良い71.3%(211件)・普通25.3%(75件)・悪い3.4%(10件)

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

17年度は企画展と連動して一般的関心の高い着物を中心とした「型染」、夏季休業中の小中学生向けを中心に企画構成した「動物とあそぼう」、名品展示で一般の関心にも応えつつ、なおかつ専門性を考慮した「近代工芸の百年」、さらに桜の季節の観客像を考慮して一般性の強い名品展示を企画した「花より工芸」展を開催した。こうした展示ラインナップによって、様々な年齢層、工芸に対する様々な関心、また季節感などに応えうる展示を行うことが出来たと考える。昨年度から開設した「人間国宝・巨匠コーナー」では、人間国宝や芸術院会員の作品を中心にし、常時、名品鑑賞の要望に応えてきた。また今年度は海外の工芸・デザイン作品の特集を行なうなど、近年強まっている欧米工芸・デザイン鑑賞の要望にも応えてきた。

また、会場で配布する展覧会の出品リストには、これまで要望の多かった作品名の読みや、素材、技法を記したものを制作した。

昨年度から開始した、ボランティアガイドスタッフによる「タッチ&トーク」では、より一層の深い理解のため、触れる作品数を増やし、また英語ガイド、障害者のためのガイド、小学校教師によるガイドなど、幅広く展開することができた。

【見直し又は改善を要する点】

観覧者の鑑賞要望は近年とみに多様化しており、日本の伝統、前衛など、様々な傾向の工芸のみならず、欧米の現代工芸、近代デザインなど、非常に幅広い。これに応えるべく、今後は3つの柱の大枠は保ちつつ、それをさらに細分化して「特集展示」コーナーを各展示期毎に設け、ニーズにより応える配慮が要される。

また、無料の出品目録に素材や技法について明記して会場で配布しているが、アンケートなどによるといまだに素材や技法を明記してもらいたいという要望がある。目録配布の方法、キャプションへ記載するなどといった改善措置の検討が要される。

「伊砂利彦 型染の美」(企画展)

方 針

我が国において染色は多種多彩な技法と様式が発展したが、近代以降、独立した造形表現として展開したことは、他国にもほとんど例を見ることができない。なかでも生産性向上の方策として考案された型染は、昭和初期より、技法上の制約から生ずるフォルムの鋭さとパターンの繰り返しによるリズムカルな構成が見直されて、多くの作家が創意の表現手段としてこの技法に臨んでいる。本展では、この染色という伝統ある分野において、技法的特性を十全に活かしながら、つねに新鮮な感覚と思想で長年制作に臨んでいる伊砂利彦の業績を検証する。それにより近代以降の工芸運動の展開を確認するとともに、現代における染色造形の可能性を問うことを目的とした。

実 績

1. 開会期間 平成17年4月26日～平成17年6月26日(55日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 出品点数 68件(うち国宝 0件, 重要文化財 0件)
4. 入館者数 23,248人(一日平均423人)(目標 8,000人)
5. 入場料金 個人 : 一般 200円 大学生 70円 高校生 40円
団体 : 一般 100円 大学生 40円 高校生 20円
6. 入場料収入 1,335,930円
7. 担当した研究員数 3人

8. 展覧会の内容

本来生産性の向上のために考案された型染は、型紙に刀で文様を彫りだし、糊を用いて防染となす技法的特性と、事物の本質を希求する近代的思想とが重なって、今日、その造形的可能性に注目が集まっている。伊砂利彦は型染の造形言語に着目して創作を展開した代表的作家のひとりであり、そのモチーフは自然の事物から音楽まで幅広い。本展では、伊砂氏の造形思考の展開を 松 水 音楽 と時代毎のモチーフを追い、近代以降の工芸運動の流れにおけるこの作家の位置と染色造形の可能性を検証した。

9. 講演会等 実施回数 ギャラリートーク 5回, パフォーマンス 1回
(年度計画記載回数: ギャラリートーク5回)
参加人数計 437人
(詳細は、「(2)-2 講演会等の事業」参照)

10. 広報

プレスリリースの作成・発送, 各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送, 鉄道駅(JR, 東京メトロ)へのポスターの掲出, チラシ配布, 新聞・インターネットへの広告掲載, その他個別に依頼のあった雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。

11. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

Let ' s Enjoy TOKYO (web) 2005 年 3 月 29 日
 「伊砂利彦展」現代の眼 (東京国立近代美術館) 第 551 号 (2005 年 4-5 月)
 「私の制作 型絵染 松 水 音楽 沖縄 無機的表現」(伊砂利彦)
 「イメージの根源を探る 追体験の愉しみ」(藤本恵子)
 京都新聞 2005 年 4 月 16 日
 「創作トーク 伊砂利彦さん 東京国立近代美術館工芸館で回顧展」(太田垣實)
 新美術新聞 2005 年 4 月 21 日号
 「伊砂利彦 型染の美展 文様と染の美, 探究の軌跡」(今井陽子)
 eArt (web) 2005 年 4 月 22 日 「展覧会情報 伊砂利彦」
 東京新聞 (朝刊) 2005 年 5 月 21 日
 「伊砂利彦 型染の美 この世界の鼓動掬い上げ意匠化」(藤田一人)
 インターネットミュージアム 2005 年 5 月 「伊砂利彦 型染の美」
 染織 No. 290 (2005 年 5 月号) 「伊砂利彦 型染の美展 東京国立近代美術館工芸館で開催」
 美術の窓 2005 年 5 月号 「中特集 伊砂利彦」
 月刊チャイム 2005 年 5 月号, 6 月号 「企画展 伊砂利彦 型染の美」
 毎日新聞 (夕刊) 2005 年 6 月 8 日 「今週の 1 点 月の道 = 伊砂利彦 型染の美から」(督)
 そめとおり 2005 年 6 月号 「伊砂利彦 型染の美」

12. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成 17 年 6 月 2 日 ~ 平成 17 年 6 月 5 日 (4 日間)
 調査方法 来館者に手渡し, 記述式 (午前・午後各 1 時間)
 アンケート回収数 300 件 (母集団 23, 248 人) 有効回答数 299 件
 アンケート結果 ・ 良い 88.3% (264 件) ・ 普通 11.0% (33 件) ・ 悪い 10.7% (2 件)

[講演会]

ギャラリートーク

(回答数 87 件) ・ 良い 79.3% (69 件) ・ 普通 18.4% (16 件) ・ 悪い 2.3% (2 件)

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

本展は, 現在も新作を意欲的に発表している作家の個展ということで, 学生や若手から中堅に至る作家が多数来館し, 時間をかけて作品を研究している様子が会期中しばしば見られた。工芸館の限られたスペース内ではあるが, 長年にわたる制作の軌跡を時間と作風の変化に沿ってある程度の数量を紹介できたことは, 専門家ならびに一般の観衆にとっても企画意図を伝えやすい構成であったと考える。また, 展覧会準備に当たり, 何度となく作家から直接聞き取り調査ができたことは, 内容の充実を図る上で大きな力となった。

さらに, 専門知識を有さない一般の観衆にも鑑賞の楽しみが広がるよう次の 3 点を配慮したが, これらに対してはアンケート結果からもほぼ好印象をもって受け入れられたようである: 型染という技法の特性の理解を促すために, 展示品とほぼ同じ内容の作品の制作工程をパネルと解説で紹介したほか, 作家の言葉や制作風景写真などを随所に配した。パネル作品の平面構成と同テーマによる着物の立体感とを比較するために, 着物作品のうち数点を会場の中央に配し, 背面だけでなくさまざまな角度から鑑賞できるようにした。音楽をモチーフとする作品の展示場所において, イメージの源泉となった音楽の CD を流した。

会期中 2 回行った作家自身によるトークには多くの観衆が集まり, 制作への熱意に満ちた言葉は, 一般の観衆と専門家の枠を越え, 直接的に参加者に響いたようであったことは, アンケートの結果からも

窺われる。伊砂氏は当館で実施中のボランティアスタッフによるガイド(タッチ&トーク)にも深い理解を示し、長時間にわたるレクチャーやさまざまな資料の提供をされた。それによりスタッフの活動への意欲が高まり、充実したガイド活動が可能となったことは大きな成果であった。また、音楽という特殊なテーマへの取り組みへの理解を深めるため、ピアニストでドビュッシーの研究者でもある青柳いづみ氏によるレクチャーとピアノ演奏会を行った。

本展は、当館でも数少ない現存かつ染色作家の個展というキーワードが予想以上に関心を集め、雑誌等でも特集記事が組まれたことは効果的であった。また、作家から提供を受けた資料を用いたボランティアガイドは好評で、口コミによる参加者も見受けられた。さらに大学機関等との協力体制により、個別のレクチャーを実施した点は参加者及び当館の双方にとって重要な試みであったと考える。展覧会の効果を会期のみ留めず、若手の育成や工芸界の振興を視野においた取り組みについては今後も積極的に実施していきたい。

【見直し又は改善を要する点】

工芸館で染織作品を展覧する際には、つねに既存の固定ケースによる制限が内容や数量の決定を大きく左右せざるを得ない。本展では、伊砂氏がその代表作である「ドビュッシー作曲前奏曲集のイメージより」を小サイズのパネルでも制作していたため、作歴の全体像を概観することが可能となったが、これはきわめて稀な事例で今後も期待できる解決策とはならない。物理的制約はすぐに解消できる問題ではなく、今後も展覧会の質をできるだけ制限しないよう、初期段階から会場構成を十分に練りながら企画を考案する必要がある。今回は、会期中に1回展示替えを行い、伊砂氏の作風の全像を伝えられるよう努めたが、展示期間外の作品や、本展では並べられなかった作品などをデジタル画像等で紹介するなど、さらなる工夫の余地があったように思う。また、作品をいろいろな角度から鑑賞できるように会場の中央に展示台を設置したが、それにより動線に曖昧さが生じてしまったことは反省点である。見た目の効果と快適な鑑賞の環境のバランスを考えながら、企画意図を十分に伝えられるよう今後も検討していきたい。

展示構成同様、展覧会関連事業の開催に際しても工芸館全体のスペースの制約は大きく、とくにピアノ演奏会に際しては規模や回数に制限を加えなければならないのは誠に残念であった。現行の条件下で鑑賞の幅を広げ、研究上の成果を上げるためには、実施内容の精査に加え、参加者に快適な環境を提供できるよう、当日の館員の配置や誘導方法においても一層の努力をしていきたい。

当館で現存作家の個展を開催することについては、中立的な姿勢を保持するために今回は必要以上の強調を避けたが、むしろある程度の積極性をもってアピールしていくことは、開催意図と当館の姿勢を明瞭にし、話題性を高める点でも有効であると考え。また、大学等の教育機関との協力についてはより長期的な計画をもって臨み、研究成果を着実に積み重ねるよう努力したい。

「日本のアール・ヌーヴォー1900-1923」（企画展）

方 針

19世紀末のヨーロッパを席卷したアール・ヌーヴォーは、明治後半から大正にかけて、日本の工芸やデザインにも大きな影響をもたらした。アール・ヌーヴォーの伝播をきっかけとして、日本の工芸家たちは、旧態依然とした日本の工芸の立ち遅れを自覚し、図案の改革の重要性を認識することになった。しかし、その影響は単に装飾様式としてのものだけではなく、アール・ヌーヴォーの重要な側面は、工芸家や図案家だけでなく、画家や建築家などもジャンルの枠組みをこえて、工芸やデザインなど、生活の身近なものの制作にも高い関心を向けるようになったことである。日本においても、アール・ヌーヴォーの伝播によって、工芸家だけでなく、画家や建築家たちの間で、創作的で装飾性豊かな工芸品を制作しようとする機運が高まりを見せるとともに、西洋の模倣ではない、日本独自の表現を模索しようとする動きが見られるようになった。この展覧会では、明治後半から大正中頃にかけて活躍した画家、工芸家、図案家、建築家たちの作品 陶磁器、漆器、刺繍、家具、絵画、ポスター、雑誌表紙、本の装幀、図案集など幅広いジャンルの作品を集め、日本におけるアール・ヌーヴォーの影響とその後の広がりを紹介し、そこに、日本近代の工芸とデザインの原点を探ることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年9月17日～平成17年11月27日（62日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 出品点数 171件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 入館者数 17,887人（一日平均289人）（目標 11,000人）
5. 入場料金
個人：一般 500円 大学生 300円 高校生 150円
団体：一般 350円 大学生 150円 高校生 50円
前売：一般 400円 大学生 200円 高校生 100円
割引：一般 450円 大学生 250円 高校生 100円
6. 入場料収入 4,956,900円
7. 担当した研究員数 3人
8. 展覧会の内容
19世紀末のヨーロッパを席卷したアール・ヌーヴォーは、明治後半から大正にかけて、日本の工芸やデザインにも大きな影響をもたらした。アール・ヌーヴォーの伝播をきっかけとして、日本の工芸家たちは、旧態依然とした日本の工芸の立ち遅れを自覚し、図案の改革の重要性を認識することになった。しかし、その影響は単に装飾様式としてのものだけではなく、アール・ヌーヴォーの重要な側面は、工芸家や図案家だけでなく、画家や建築家などもジャンルの枠組みをこえて、工芸やデザインなど、生活の身近なものの制作にも高い関心を向けるようになったことである。日本においても、アール・ヌーヴォーの伝播によって、工芸家だけでなく、画家や建築家たちの間で、創作的で装飾性豊かな工芸品を制作しようとする機運が高まりを見せるとともに、西洋の模倣ではない、日本独自の表現を模索しようとする動きが見られるようになった。この展覧会では、明治後半から大正中頃にかけて活躍した画家、工芸家、図案家、建築家たちの作品 陶磁器、漆器、刺繍、家具、絵画、ポスター、雑誌表紙、本の装

幀,図案集など 幅広いジャンルの作品を集め,日本におけるアール・ヌーヴォーの影響とその後の広がりを紹介し,そこに,日本近代の工芸とデザインの原点を探ることを目指した。

9. 講演会等 実施回数計 5回(年度計画記載回数:ギャラリートーク4回)

参加人数計 193人

(詳細は,「(2)-2 講演会等の事業」参照)

10. 広報

プレスリリースの作成・発送,記者内見会及び記者発表の開催,各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送,鉄道駅(営団地下鉄)へのポスターの提出のほか,チラシ配布,その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。

11. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼(東京国立近代美術館) 第553号(2005年8-9月)

「東西交流のなかのアール・ヌーヴォー」(稲賀繁美)

現代の眼(東京国立近代美術館) 第553号(2005年8-9月)

「新美術はどこから アール・ヌーヴォーと日本」(森仁史)

朝日新聞 2005年10月4日(夕刊) 「元祖お家芸琳派にあり」(山盛英司)

東京新聞 2005年11月5日 「芸術運動としての展開を検証する試み」(藤田一人)

アート・トップ 2005年10-11月 「東西往還 遥かなる“琳派の旅”」(木田拓也)

12. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成17年10月13日~平成17年10月16日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し,記述式(午前・午後各1時間)

アンケート回収数 300件(母集団17,887人)有効回答数296件

アンケート結果 ・良い88.5%(262件)・普通11.5%(34件)・悪い0.0%(0件)

[講演会]

ギャラリートーク

(回答数31件)・良い77.4%(24件)・普通19.4%(6件)・悪い3.2%(1件)

自己点検評価

【良かった点,特色ある取組み】

本展では,日本におけるアール・ヌーヴォーの展開を,工芸やデザイン,絵画や建築など幅広いジャンルの作品で構成し,従来の様式史的な観点にとらわれず芸術運動として捉え,さらに,ジャポニスムの逆輸入としての日本でのアール・ヌーヴォーの展開を示そうとするものだった。展示物が幅広いジャンルにまたがり,しかも,さまざまな要素が複雑に複合するため,来館者に雑多で散漫な印象を与えるおそれがあった。そのため,展覧会を次のように大きく3つの部門で構成することによってアール・ヌーヴォーの日本における展開の大枠を示しつつも(「日本人が見たヨーロッパ世紀末」,「日本のアール・ヌーヴォー」,「Life生活/生命 日本のアール・ヌーヴォーのその後」),さらに,いくつかのキーワード(例えば,女,写生,琳派など)を手がかりとして示し,文字パネルなどで解説をすることにより,さまざまな要素が複雑に絡み合いながら展開していったアール・ヌーヴォーの複合性や多面的な様相を,来館者にわかりやすく示すように工夫した。アール・ヌーヴォーを「様式」としてでは

なく、「運動」としてとらえるという本展の企画側の試みが、来館者にちゃんと受け止められるか否かがもっとも懸念されたが、来館者のアンケートを見ると、流れが自然でわかりやすかった、アール・ヌーヴォーと日本とのつながりがわかってよかったなどという声があり、企画側の意図に対して、来館者側の理解をえられたものと思われ、こうした要素が、目標を大幅に上回る来館者数の動員につながった要因と思われる。新聞の展評などでも、従来の様式史的な見方にとられない意欲的な企画として高い評価を得た。

今回の展覧会では、会期中、外部から2名の講師を招いてギャラリートークを行った。また、会期中3回、展覧会担当者がギャラリートークを行った。また、ボランティアのガイドスタッフによるガイドツアーも、会期中、毎週水曜日と土曜日に開催しており好評だった。

今回の展覧会は、「アール・ヌーヴォー」という、世間一般にも馴染み深いテーマを掲げた展覧会だったということもあり、さまざまな雑誌で幅広く紹介された。今回、広報の新しい取り組みとして、インターネットのバナー広告の掲出を行った。また、展覧会のチラシには50円の割引券をつけた。

【見直し又は改善を要する点】

来館者アンケートからは、解説パネルが少ない、という不満の声があった。今回の展覧会では、各章や各セクションなど、展示構成、要所要所に解説パネルをつけ、さらに、作家や作品やキーワードなど、重要なポイントに、小さな解説を20個ほど作成して、鑑賞者の理解の助けとなるようにできるだけ工夫をしたにもかかわらず、それでも「まだ足りない」という要望の声が上がったことについては、やはり鑑賞者側からの声として真摯に受け止め、今後も工夫し改善していかねばならない課題として検討していきたい。狭い展示ケースの中で、作品鑑賞の妨げにならないように解説を配置する仕方や、読みやすい解説の作成の工夫など、今後も解説パネルに関しては、改善の研究が課題と思われた。

また、来館者に配布する無料の出品リストに、かねてから要望のあった作品の素材や技法を記載したが、アンケート調査では、「作品の素材や技法を知りたい」という要望の声があった。出品リストの配布方法をはじめ、今後の普及体制を考えていきたい。

外部講師のギャラリートークでは多数の聴講者が集まり、展覧会会場が混雑した。工芸館の会場では、20～30人程度どがちょうど良いと思われるが、講師やテーマによっては、人が大勢集まって、会場が混雑してしまうことがしばしばあり、そのような場合には、聴講を希望しない観覧者のための動線の確保が課題と思われる。

今回の展覧会は、陶芸、漆工、染織などといった特定のジャンルに限定されない、幅広いジャンルにまたがる作品、作家を紹介する展覧会だったためか、陶芸雑誌などように、特定ジャンルに限定した雑誌媒体からはあまり取り上げられなかった。

「渡辺力 リビング・デザインの革新」(企画展)

方 針

日本のモダン・デザイン史において先駆的な役割を果たしたデザイナーの活動を検証するという目的で企画されてきたこれまでのデザイン展の方針を踏襲し、本展では家具やプロダクトの分野で戦後のデザイン界を牽引してきたデザイナー・渡辺力(1911 -)を取り上げた。

1930年代、今日一般にバウハウスやル・コルビュジエに典型的な思想と作品が見出されるとされるモダン・デザインに触れた渡辺は、機能に裏打ちされ、かつ日本の生活に立脚したかたちを追求してきた。床座を旨とする日本の住生活に、西洋の生活様式の構成要素であるイスを見事に融合させ、近代日本の生活スタイルを明快に表現した初期の《ヒモイス》(1952年)や、伝統的な素材である籐をデザインのプロセスで捉えなおした《トリイ・スツール》(1956年)は、日本のモダン・デザインを体現するものとして国内外で高く評価されている。また、日本インダストリアル・デザイナー協会(JIDA)や、手仕事の発掘と普及をめざしたクラフト・センター・ジャパンの設立、そのほか多くの批評活動を通して、いまだ黎明期にあった日本のデザイン運動に方向を与えその発展に尽力したという点でも、重要な役割を果たした。およそ半世紀におよぶ渡辺力の活動の歩みを代表作で回顧し、渡辺のデザインに胚胎する思想を探った。

実 績

1. 開会期間 平成18年1月13日～平成18年3月5日(45日間)
2. 会 場 東京都国立近代美術館本館 ギャラリー4
3. 出品点数 45 件(うち国宝 0件, 重要文化財 0件)
4. 入館者数 18,757人(一日平均 417人)(目標 11,000人)
5. 入場料金 個人 : 一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
団体 : 一般 210円 大学生 70円 高校生 40円
6. 入場料収入 本館常設展に含まれる
7. 担当した研究員数 2人

8. 展覧会の内容

渡辺力(1911)のデザイン思想を探るため、本展ではそのデザインの本領である家具に着目した。渡辺の活動は戦後に本格的に展開されたため、展覧会ではまず第一に、時系列にそって1950年代から80年代までに製作された家具デザインを、家具が使用されている室内空間の写真とともに展示した。また、渡辺がライフワークとして取り組んでいる領域に時計のデザインがある。本展では、60年代から現在にいたるまで手がけられた一連の時計のデザインを展示し、家具デザインのみならず生活にかかわるプロダクトにも通底する渡辺力のデザイン観を提示した。また、最後に、デザインのルーツを示唆するため、戦前の作品も取り上げた。

9. 講演会等 実施回数計 3回(年度計画記載回数: ギャラリートーク3回)
参加人数計 319人
(詳細は、「(2) - 2 講演会等の事業」参照)

10. 広報

プレスリリースの作成・発送,記者内見会及び記者発表の開催,各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送,鉄道駅(営団地下鉄)へのポスターの提出のほか,チラシ配布,その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。また展覧会開催と同時期に,渡辺力デザインによる腕時計の新作が発表されるのに合わせ,製造・販売先であるセイコーウオッチ社と,広報において連携を図った。

11. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼(東京国立近代美術館) 第555号(2005年12-2006年1月)

「デザインと私と」(渡辺力)

現代の眼(東京国立近代美術館) 第555号(2005年12-2006年1月)

「剣持勇と渡辺力」(松本哲夫)

日本経済新聞 2006年2月25日(夕刊) 「生活あってこそデザイン」(窪田直子)

新建築住宅特集 2006年3月号 「意思のデザイン」(藤森泰司)

芸術新潮 2006年3月号 「渡辺力の禁欲的デザイン論」(無署名)

12. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成18年2月16日~平成18年2月19日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し,記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件(母集団18,757人)有効回答数298件

アンケート結果 ・良い74.9%(223件)・普通22.5%(67件)・悪い2.6%(8件)

[講演会]

ギャラリー・トーク

(回答数37件)・良い91.9%(34件)・普通8.1%(3件)・悪い0.0%(0件)

自己点検評価

【良かった点,特色ある取組み】

特に渡辺の初期デザイン活動は,戦後新興住宅建築との関係が注目され,また,その後の活動においても,家具を取り巻く室内空間との関係を重視した活動がなされていたため,本展ではなるべく家具が用いられていた(あるいは現在も使用されている実際の)空間の写真とともに作品を展示するように心がけた。このような展示方法の実現に当たっては,セイコーエプソン社の独自の印刷技術の提供を受け,高い印刷クオリティによる大きな印刷画面に再現された室内空間が,臨場感ある展示を構成するのに役立った。また,室内空間の写真は,新建築社より提供を受けた。これにより,効果的に渡辺力のデザイン観を提示することができた。家具は通常の美術作品と異なり,多かれ少なかれ建築空間と関わりがある。そのため写真によってそうした空間の情報を補うことで,作品の鑑賞を補助したり,より豊かな鑑賞体験を提供することができる。今後も企業との協力関係を積極的に築き,効果的な展示が構築できるよう取り組んでいきたい。

【見直し又は改善を要する点】

来館者アンケートで,キャプションが見にくいという指摘を多く受けた。今回の展覧会では,工芸館でのケース内展示と異なり,作品のサイズも大きくケース外展示が多かったため,キャプションのサイ

ズ、文字サイズもともに大きくした。しかしながら、一部ケース内展示した作品のキャプションが小さかった箇所があり、今回はこの点を十分考慮をして改善していきたい。また、サイズが大きいキャプションについても、鑑賞を妨げずかつ見やすい位置に掲示するよう心がける。

あわせて展示室内で使用していたモニターの高さが低いという指摘も受けた。17インチの小さなモニターのため、比較的高めの位置に設置し、少し混雑した会場でも見やすくするべきであった。今後、多くの人に見やすい展示環境を提供するため、モニターの設置位置にも十分配慮していきたい。

「東京国立近代美術館工芸館所蔵作品巡回展」

方 針

東京国立近代美術館工芸館が所蔵する近代から現代にいたる、優れた工芸作品を効率的に活用・公開し、近代工芸への理解と普及を図るとともに、公開事業を推進することで地方における近代工芸の鑑賞機会の充実を促進する。また工芸館の事業を広く普及させ、あわせて企画・運営をとおして地方美術館との連携・交流を積極的に促進する。

平成17年度は、「近代工芸の名品展」を北海道立釧路芸術館と秋田市立千秋美術館で開催した。

実 績

[北海道立釧路芸術館]

1. 開会期間 平成17年8月27日～平成17年10月13日(41日間)
2. 入館者数 4,183人(一日平均102人)

[秋田市立千秋美術館]

1. 開会期間 平成17年10月21日～平成17年12月11日(45日間)
2. 入館者数 2,503人(一日平均48人)
3. 展覧会の内容

日本の近代工芸の発展をその歴史的な流れや動向と照らし合わせながら、工芸館が所蔵する約2,000点の工芸コレクションのなかから、明治期以降から現代にいたる時代の展開や革新的な動向などを代表する工芸各分野の作家の優品110点を陳列した。作家及び作品の選択は工芸館が主導をとり、各美術館の会場の問題やこれまでの工芸関連展覧会の開催を考慮し、また地元作家の選択など綿密に協議して行った。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

工芸館所蔵作品巡回展は、他館と共同で所蔵作品展を開催し、美術館活動の活発化、他館との交流、工芸館や所蔵作品の周知徹底による認知度の向上などを一気に図る、初めての大きなプロジェクトであった。初年度は釧路、秋田というこれまでほとんど工芸館との交流がなく、認知度の低いところでの開催であり、工芸館、所蔵の近代工芸作品の存在を知らしめる点で成果があった。また工芸課主任研究官による近代工芸に関する講演によっても、初めての歴史的・系統的な近代工芸の紹介が行われ、有意義であった。

【見直し又は改善を要する点】

この企画の重要な点の一つは、いかに多くの観覧者を得るかという点だが、その点で広報活動も含めて弱かった。また開催館学芸との事前の学術的な協力活動が不十分で、展覧会のコンセプト、作品選定などを論議する会合などをより多く開催することが必要である。そうした協力関係がひいては広報活動の活性化などにつながるものであり、活動全般をより有機的・総合的に進めていく必要がある。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

貸与・特別観覧の件数

(1) 本館

ア. 貸与 80件(332点)

イ. 特別観覧 183件(418点)

ウ. プリント・スタディ(写真作品閲覧制度)*平成17年12月より実施

利用件数 8件(12名)

閲覧作品数 246点

(2) 工芸館

ア. 貸与 36件(296点)

イ. 特別観覧 38件(98点)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

本館： 例年どおり多数の作品を貸し出し、各美術館の活動の充実に寄与したと考える。また、海外の展覧会への貸し出しもあり、日本文化の海外普及にも成果があった。

特別観覧の件数の推移については増加傾向にあるが、画集等の単行本が主流であった時代に比べ雑誌新聞等、美術作品が紹介される媒体が幅広くなったことが背景にあると思われる。

工芸館： 申請件数及び作品点数は増加する傾向を示している。平成17年度は、当館の所蔵作品による企画展を初めて開催した三重県立美術館への協力によって、貸与の点数が増加した。今後ともこのような例が増えれば、一層、所蔵作品の公開に繋がるものと思われる。

また、当館の所蔵作品がより広く知られることで、研究者・専門家や大学学生に対して熟覧の機会も増えてきている。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 貸し出しについては、従来から作品の状態、常設展での使用頻度、巡回先の数などを考慮し、作品の保全に配慮しているが、近年、各地からの貸出依頼が増加しており、調整が難しくなっている。また、貸与に関わる諸々の作業量の増大が研究員への過大な負担を招きつつあるため、業務の一部を外部委託するなどの方策を検討したい。

特別観覧については、その多くが商業利用であることから、現今の社会的な基準に照らして料金を改定することも検討すべきと考える。

工芸館： 平成17年度から実施し始めた当館所蔵工芸作品による地方美術館への巡回展や大量貸出の機会、主要作家の重要作家の作品の申請重複等も重なってきている。作品の保全や当館での公開を主に、貸出のスケジュール調整等に留意していきたい。また、貸与、特別観覧とも、工芸館の収集作品及び展覧会に親んでもらえる機会でもあり、広報活動とも連動させてさらに積極的に展開していきたい。

*添付資料 貸与件数等の推移(事業実績統計表 p.8)

特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

収蔵品に関する調査研究

美術作品に関する調査研究

収集・保管・展示に関する調査研究

美術史、美術動向、作者に関する調査研究

世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

詳細は「事業実績統計表 調査研究一覧」を参照

2. 客員研究員等の招聘実績

本館	1名(年度計画記載人数: 1人)
工芸館	1名(年度計画記載人数: 1人)

3. 調査研究費 予算額 40,841,000円 決算額 43,669,377円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館： 当館の写真作品収集事業は着手以来10年以上を経て、千数百点の規模に及んでいる。平成17年度に客員研究員1名を招聘し、外部の写真研究者に向けた予約制での閲覧制度「プリント・スタディ」を発足することが出来た。これにより、多くの研究者、写真家などに向け、希望の作品を間近に精査する機会を提供できるようになった。近代日本写真史研究に寄与するものとしてたいへん好評を得ている。

展覧会等に関わる調査研究については、海外の美術館や国内の大学に在籍する研究者との共同調査・研究のもとに「アジアのキュビズム」展と「ドイツ写真の現在」展を実施したことが、成果として挙げられる。国内外の人的交流をベースにしたこの種の展覧会組織形態は、機会を得て初めて実現されるものとはいえ、今後の一つのモデルケースとなろう。また、小林古径及び須田国太郎の回顧展は、それぞれ東京・京都の国立近代美術館が中心となり、両館の研究調査の蓄積を持ち寄ることによって実現したものであった。また、科学研究費補助金による基盤研究「戦後の日本における芸術とテクノロジー」は、当館・埼玉大学・武蔵野美術大学・神奈川県立近代美術館の研究者チームによるものであるが、その成果が生かされるかたちで山口勝弘展(神奈川県立近代美術館)が開催されたことは、成果の一つである。

工芸館： 所蔵作品の中から「古典を参考にしたもの」、「近代工芸・デザインの革新をもたらしたもの」というテーマで作品を選び、工芸関係誌に「名品紹介」と題して解説を行った。さまざまな視点から解説を試み、所蔵作品研究を進めた。展覧会研究はカタログに反映した。

また、客員研究員をボランティア活動の一層の進展とタッチ&トークなどの新たな手法を開発するための調査研究のために招聘した。

「日本のアール・ヌーヴォー展」に関連して、東洋陶磁学会東日本研究会研究会を開催した。

平成17年度も大和日英基金の助成を受け、イギリス現代陶芸に関する研究交流を行った。その一部としてイギリスの研究者によるギャラリートークを行った。また、文化庁の招聘事業として、スイスの現代陶芸研究者との研究交流も行った。この両者の研究発表を東洋陶磁学会東日本研究会・講演会という形で行い、当館や国内の研究者との研究交流の場とした。

当館研究紀要にも研究成果を発表した。

また、平成17年度は、唐澤昌宏主任研究官が4ヶ月間ロンドンに滞在し、近現代工芸の調査研究に当たり、現地の研究者および作家との交流を図った。

【見直し又は改善を要する点】

本館：美術館研究員の場合、研究成果の多くは展覧会やカタログの形で公表されるのが通例であるが、近年では学会等で発表するケースも見られるようになってきた。とはいえ、まだ十分とはいえ、今後とも、研究成果の外部への積極的な公表を促進することとしたい。

工芸館：研究成果の発表が行われても、展覧会カタログ、研究紀要などを除いて、なかなか文字ないしデータ媒体にまとめて公刊することが難しい。今後は予算措置も含めてこの方途を工夫してきたい。

* 添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.60）

4. 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
- また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートークを実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
- それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キューレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
- また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方針

[本館]

教育普及活動は美術館のもつ知識や知見をさまざま形で提供することで、来館者に美術への関心と理解を高めてもらうとともに、美術館をより身近なものと感じて、美術館の愛好者となってもらうことを大きな狙いとしている。そのための手段、方法は種々考えられるが、対象となる層は子どもから大人まで、また美術館未経験者から専門家まで多岐にわたっているため、それぞれに対してきめのこまかな対応が望まれている。とくに児童生徒に対しては、将来の美術愛好者育成という観点も含めて、学校と連携をとりながら教育普及活動を進めていく必要がある。

[工芸館]

いまだ学校教育でも十分に行われていない工芸鑑賞の機会を設けるために、素材・技法や作品解説、また作家のデータや歴史など、情報の特性ごとに媒体にも工夫を加えて提供していきたい。また、当館研究

員のほか、作家や館外研究者等によるトーク等を多数実施し、多彩な視点から工芸作品を検証してこの分野の普及の促進に努める。その際、対象となる年齢層や専門的知識の有無にあわせられるよう、実施方法にも十分配慮するよう心がける。

実績（総括表）

(1) - 1 資料の収集及び公開

本館

収集件数 3,898件
公開場所 本館アトライブラリ（本館2階）
利用者数 2,870人
公開件数 9,610件（館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。）

工芸館

収集件数 703件
公開場所 工芸館図書閲覧室（工芸館1階）
利用者数 479人
公開件数 1,624件（館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。）

(1) - 2 広報活動の状況

刊行物による広報活動 10種

ホームページ（美術館情報システム）による広報活動

本館・工芸館のホームページにおいては、画面上の展覧会情報に会場風景、作品図版、各種トピック及び用語解説（工芸作品）等を掲載するほか、最新情報（「トピックス」欄）や講演会・ギャラリートーク等イベント情報（「イベント」欄）の充実を図った。また、「こどものページ」を開設し、本館・工芸館の所蔵品・展覧会の普及や、夏休み等の児童生徒向けプログラムの告知に努めた。さらに、更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに、インターネットにおける情報検索時の露出度を向上させるよう努めた。

また、メールマガジンの発行（毎月発行）を継続し、常設展の展示作品や特集展示の予告・案内を始めとして、美術館の側から来館者に積極的に働きかけるよう努めた。

なお、平成17年度は、ホームページの構成およびデザインを一新し、情報更新の頻度の増加に対応するための検討とコンテンツの準備を行なった。

マスメディアの利用による広報活動

本館では、各展覧会開催に際して、雑誌（美術専門誌や情報誌）・新聞・テレビ向けの資料（プレス・リリース）にカラー印刷による図版を掲載し、見所を簡潔に要約するなど、その充実を図った。また、代表的な情報誌『ぴあ』の展覧会紹介欄を年間枠で買い取り、定期的な広報媒体とするなど、広報力の強化を図った。

工芸館では、引き続き次の3誌に所蔵品を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図った。

ア．「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』

イ．「古典が息づく現代の工芸 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』

（平成17年4月～12月）、「茶室の工芸学 現代工芸家の茶器」（平成18年1月～）『茶道誌淡交』

ウ．「日本の至宝 東京国立近代美術館コレクションより」『TAIKI』（季刊）

また、『ICLUB』（発行：伊勢丹）に情報を提供し、各号で展覧会広報を行った。

(1) - 3 デジタル化の状況

本館	平成17年度にデジタル化した美術作品の件数	520件
工芸館	平成17年度にデジタル化した美術作品の件数	340件

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

本館

小・中・高校生に対するギャラリートーク，ガイダンス，職場見学等の対応
教職員鑑賞プログラム「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」教職員研修会
こどもセルフガイド
ホームページによる広報
ボランティアによる小中学生向けプログラム

児童生徒を対象にした事業としては，申し込みに基づく随時の講演会，ギャラリートーク，職場見学の受入れ等を行っている。平成17年度の受入れ実績の詳細は，小中高校生に関しては「(2) 児童生徒を対象とした事業」を，また，大学生に関しては「(6) 大学等との連携」を参照のこと。

本館

小学校： 4件(151人)
中学校： 17件(220人)
高校： 2件(181人)
(参考)小中高校教員の研究会等への協力： 4件
ホームページ内に「こどものページ」を設けている。

工芸館

中学校： 2件(9人)
(参考)大学・専門学校： 3件(84人)
(参考)小中学校の教員の研究会： 2件(28名)
(参考)工芸鑑賞プログラム作成のための共同研究(24名)
ホームページ内に「こども工芸館」を設けている。
所蔵作品展「動物とあそぼう」に関連して，児童生徒を対象とした鑑賞補助教材を提供し，ワークショップ等を開催した。(詳細は「児童生徒を対象とした事業」を参照)

(2) - 2 講演会等の事業(詳細は別添資料参照。)

本館

講演会	9回	1,002人
ギャラリートーク	41回	1,751人
所蔵品ガイド(ボランティアによる)	281回	4,112人

工芸館

ギャラリートーク	23回	1,097人
タッチ&トーク(ボランティアによる)	91回	
	タッチ：967人，会場トーク：1,134人	
パフォーマンス	1回	108人

(3) - 1 研修の取組

本館において、独立行政法人国立美術館キュレーター実務研修者を1名受け入れた。

(3) - 2 大学等との連携

本館 受入期間 平成17年8月22日～平成17年8月26日(5日間)
開催場所 本館(会議室・アトライブラリ・所蔵品ギャラリー)
参加者数 10人(昨年度実績9人)
担当した研究員数 11人(受入れ担当1人, 講義等10人)
実習内容 講義・館内見学・ギャラリートーク実施・展示プラン立案など。

工芸館 受入期間 平成17年8月22日～平成17年8月26日(5日間)
開催場所 工芸館(会議室)
参加者数 6人(昨年度実績4人)
担当した研究員数 7人(客員研究員を含む)
事業内容 講義, 館内見学, 作品取り扱いなど。

毎年1回博物館実習生の受け入れを行っている。美術大学等と協力関係を結び、個別にギャラリートークや熟覧等の機会を設けるとともに 授業の一環として工芸館での作品研究の時間を設定している。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

本館

登録人数 28名

工芸館

登録人数 19名

工芸館では平成16年6月から展覧会での解説及び触知による作品鑑賞(タッチ&トーク)のためのボランティアを導入した。

(4) 渉外活動

展覧会において各企業から協賛, 協力を得た。(「(10) 渉外活動」参照)

(5) 教育普及経費 予算額 153,286,000円 決算額 117,726,763円

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

本館: 平成17年度も, そのほとんどについて当初の目的を達成したと考えている。 については, 東京都現代美術館, 横浜美術館との共同により平成16年3月に公開した美術図書館横断検索ALC (Art Libraries' Consortium)が, 順調に稼働し, 利用を継続させており, 平成17年度は, 加えて国立西洋美術館が参加して, 4美術館を網羅するものとなった。デジタル画像の公開については, 継続的なデジタル画像の作成に努めるとともに, 文化庁の「文化遺産オンライン」に535点の作品基本文字データ及びカラー・デジタルデータを提供していることは, 昨年度と同様であるが, さらに文化遺産オンライン運営委員会専門委員会に参加して, メタデータ自動収集策であるハーベスティングのための実証実験に協力した。昨年度, 京都国立近代美術館, 国立西洋美術館, 国立国際美術館と独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムを公開して, 4館の所蔵作品を一括して検索することを可能にしているが, さらに文字データ204件, 画像データ17件を追加した(4館全体では文字データ4,799件, 画像データ79件を追加)。また, 海外からの検索をより簡便にするため

に、検索インターフェースの英語版の開発を進めて、試行版を平成18年3月末日に公開した。

本館におけるアトライブラリの利用に関しては、入室者数、公開資料数、公開請求件数、いずれも昨年度同様に増加の傾向にあり、美術図書館横断検索ALCの効果、特に公開資料数(閉架書庫からの出納資料件数)に現れていると考える。

工芸館： ギャラリートークの内容に多様性をもたせるために、当館研究員のほか、館外の研究者や作家を招き、多彩な視点から作品を鑑賞する機会を設けた。招聘した研究者や作家については、工芸の専門家だけでなく、美術史全般に知識を持つ研究者やピアニスト、また、図鑑のイラストレーターなど、幅広い立場から自身の研究内容や制作について語ってもらった。液晶画面の映像機器を取り入れ、参考作品を紹介するなど、ギャラリートークの多様性を図った。マイクを効果的に用いて多数の参加者への利便性を試みた。「人間国宝・巨匠コーナー」では日本のみならず欧米の作家も取り上げ、その際イギリスの研究者によるギャラリートークを行い、より一層の作品理解を図ることができた。

この三年間続く一般紙への掲載記事によって、工芸館の活動の周知がある程度行われたことは、アンケート結果等からも推察できる。今後も専門誌への働きかけとともに、このような一般誌へのアプローチを行い、幅広い観衆層への働きかけを試みていきたい。

また、昨年度より展覧会期中の毎週水・土曜日に実施しているボランティアガイド(工芸館ガイドスタッフ)によるタッチ&トークは、参加者のなかにもリピーターがみられ、悪天候の日にもこれを目的とする来館者がいることから、少しずつ定着しはじめていることが推察できる。タッチ&トークは、一般の観衆のほか、夏季の児童生徒を対象とする時間についても関心が高まり、本年は美術教育のモデルケース作成の試みを都内小学校と共同で行った。ガイドスタッフの活動は1年以上の経験を積んで内容も深まり、英語トークやハンディキャップを持つ方へのトークについても問い合わせがくるようになった点も、大きな成果と考える。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 昨年度総務省から出された「勸告の方向性」に応えた見直しとして、については「国立美術館の教育普及事業に関する委員会」を立ち上げ、今後、国立の機関としてなすべき教材開発や教員研修について検討を開始した。その結果、平成18年度に全国規模の教員・学芸員研修を実施することを決定した。の各種解説プログラムは質量ともに増大したため、実施・運営法を一部改め、キュレータートーク(旧フライデー・トーク)、アーティスト・トークは研究員による実施・運営、所蔵品ガイドとハイライト・ツアーは解説ボランティアによる実施とした。

工芸館： 継続的に行っている大学等専門教育機関との提携はある程度定着したが、今後は1年単位で長期的に計画し、より効果的な研究成果の蓄積を実現したい。また、工芸分野への関心をさらに高めるためにも、定期的に館外の専門家によるトークを行い、それを目的として来館するリピーター層の構築を検討したい。さらに工芸作家団体等との連携を強め、所蔵作品の研究機会を設け、その成果を今後の広報活動に活かせるようデジタル媒体等で公開するなど、教育普及の質を高める工夫を行う。

同時に、専門的知識を持たない層への普及効果を向上するために、ボランティアスタッフの活動も幅広く実施できるよう、工芸館ガイドスタッフ2期メンバーの募集を行って人員の増加に努めた。12月からの約3ヵ月半の研修を行うとともに、タッチ&トークの実施方法や活動内容をこの機会に見直して、より多くの鑑賞機会を設けられるよう心がける。英語トークやハンディキャップを持つ方へのトークは、これまで試行段階にあったため周知も限定していたが、来年度以降はこのガイド活動の特性を積極的に打ち出して、幅広い層を対象としたガイドを実施したい。

* 添付資料

教育普及件数の推移(事業実績統計表 p.11)

(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

- | | | |
|---------|----|--------|
| (1) 本館 | 件数 | 3,898件 |
| (2) 工芸館 | 件数 | 703件 |

2. 公開

(1) 本館

- | | | |
|------|----------------|--------|
| 公開場所 | アートライブラリ(本館2階) | |
| 公開日数 | 218日間 | |
| 公開件数 | ・公開資料数 | 9,610件 |
| | ・公開請求件数 | 1,722件 |
| 利用者数 | 2,870人 | |

(2) 工芸館

- | | | |
|------|-----------------|--------|
| 公開場所 | 工芸館図書閲覧室(工芸館1階) | |
| 公開日数 | 168日 | |
| 公開件数 | ・公開資料数 | 1,624件 |
| | ・公開請求件数 | 354件 |
| 利用者数 | 479人 | |

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館： 本館アートライブラリは、3,898件の図書・カタログを受け入れ、平成17年度末現在の蔵書総数は、99,730件の図書・カタログと、3,420誌の雑誌となった。また、平成17年度中に行った資料の交換件数は、国内機関との間で274件、国外機関との間で212件であった。国立西洋美術館、東京都現代美術館、横浜美術館との美術図書館横断検索ALCは、順調に稼働しており、閉架資料の利用件数が昨年度同様拡大している。アートライブラリについては、ALCの紹介とともに、日本図書館協会主催全国図書館大会(於、水戸)等でも積極的に広報されている。また、来年度公開予定の国立新美術館の図書室との連携について、資料交換を含んで、共同的な運営を計るよう協議を進めた。アートライブラリの中核となる資料である展覧会カタログについては、国立情報学研究所(NII)コンテンツ課主催の「展覧会カタログ等の取扱いに関する検討会議」に、東京藝術大学、筑波大学、女子美術大学、国立西洋美術館とともに出席して、NACSIS-CATへの登録促進について協議し、「展覧会カタログに関する取扱い及び解説(案)」「コーディングマニュアル(展覧会カタログに関する抜粋集(案))」を共同で策定した。また、来年度NIIによる展覧会カタログの遡及入力事業について、参加することがになった。

工芸館： 工芸館図書室は、528件の図書・カタログ・雑誌を受け入れ、平成17年度末現在の蔵書総数は12,801点の図書・カタログと650誌の雑誌となった。近年の工芸館の新収蔵品でも増えつつあるイギリスを中心とした欧米の工芸に関する研究書を収集した。また、工芸制作の現場や作家の言葉を収録したビデオを収集した。閲覧室の利用者による閲覧状況をみると、一般では入手し難い工芸関

係の展覧会カタログや雑誌などに対する要望が高く、今後これらの収集に努めていきたい。

また、平成17年度の図書閲覧室の利用者数は479人(1624件)であった。工芸館の閲覧室のキャパシティとしては(対応するスタッフや閲覧室のスペース的な面で)、現状がおおむね限界といえるかもしれない。個人的な調査を目的とした利用者以外にも、工芸館で開催中の展覧会に関連した資料を閲覧する利用者の増加が見られ、展覧会ごとに作成し、館内で配布しているリーフレットやホームページ上において、展覧会開催にあわせた参考図書の紹介を行った結果が見られるようになってきたといえる。

【見直し又は改善を要する点】

本館： アートライブラリの年間利用者数は、2,870人であり、昨年同様、利用者の増加傾向は継続している。引き続き、資料の収集整備と併せて、ホームページその他の媒体を活用しながら広報し、利用の促進に努めていきたい。平成15年度に実現した美術図書館の横断検索については、平成17年度、国立西洋美術館による正式参加が実現しており、来年度も同様に参加館を増やして、横断検索の可能範囲をさらに広められるよう努める。書誌データの蓄積についても、図書・カタログ・雑誌の基本的な書誌情報に加えて、より文献の内容を反映する個々の目次情報について、継続してデータ量を拡大させる必要がある。

工芸館： この夏、こどもを対象とした「動物とあそぼう」展の開催にあわせて、こども向けの工芸の参考資料を多数購入したが、残念ながら、こどもによる閲覧請求はなかった。来館の対象としては、小学校低学年を想定していたのだが、小学校低学年の児童が自主的に閲覧室を利用するのは難しかったのかもしれない。

工芸・デザイン関係の書誌を体系的に収集している施設は国内でも稀有であり、今後ますます重要度は高まると思われる。今後も継続して基礎資料の充実を図っていきたいが、図書の配架スペースがほぼ限界に達しており、蔵書の配置場所の確保が課題といえる。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集, 保管, 修理, 展示, 教育普及, 調査研究その他の事業について, 要覧, 年報, 展覧会図録, 研究論文, 調査報告書等の刊行物, ホームページ, またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに, 国立美術館への理解の促進を図る。

また, その内容について充実を図るよう努力するとともに, 4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実 績

1. 刊行物による広報

(1) 美術館ニュース「現代の眼」

発行年月日 偶数月発行(発行回数6回, 発行部数6冊)(年度計画記載発行回数6回)

料 金 350円

配布先 運営委員等, 都道府県の中央図書館, 大学附属図書館, 都道府県生涯学習センター, 研究機関等

特記事項 本館・工芸館の特別展・企画展にあわせた特集を組み, その会期内に発売できるように調整することで, 来館者が鑑賞時に有効に活用できるように心がけた。展覧会以外の活動についても, レポートとして適宜掲載し, 資料として後年活用されるよう心がけた。

(2) ミュージアムカレンダー(展覧会予定表)和文版・英文版

発行年月日 1回発行(発行回数1回)(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 会場内配布, 都内の小・中学校等

(3) 年報

発行年月日 1回発行(発行回数1回)(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 大学附属図書館・研究機関等

(4) ギャラリーガイド

ギャラリーガイド英語版 *Gallery Guide to the Collection of The National Museum of Modern Art, Tokyo Modern Japanese Art, A Concise History* (料金 1,100円)

(5) 展覧会図録

ア. 小林古径展 料金 2,300円

イ. アジアのキュビズム 境界なき対話 日英語版 料金 1,800円

ウ. ドイツ写真の現在 かわりゆく「現実」と向かいあうために 料金 2,000円

エ. 須田国太郎 料金 2,000円

オ. 生誕120年 藤田嗣治展 料金 2,300円

カ. 「伊砂利彦 型染の美」展 料金 1,200円

キ. 「日本のアール・ヌーヴォー1900-1923 工芸とデザインの新時代」展 料金 1,400円

ク. 「渡辺力:リビング・デザインの革新」 料金 1,000円

(6) 目録・ガイド

発 行 常設展(所蔵作品展), 企画展開催時

料 金 無償
配布先 会場内配布

[本館]

- ア．所蔵作品展「近代日本の美術」 会場案内
- イ．小林古径展 出品目録（展示替一覧）
- ウ．ドイツ写真の現在 作家解説・作品リスト
- エ．アウグスト・ザンダー展
- オ．東京国立近代美術館体験型ワークシート MOMATかんさつ日記
- カ．須田国太郎展 Floor Guide
- キ．藤田嗣治展
- ク．藤田嗣治展こどもセルフガイド

[工芸館]

- ア．各所蔵作品展及び企画展でフロア・ガイドを配布
会場図面，作家名読み，作品名読み，作家略歴入り
- イ．作品観賞カード（使用作品：四谷シモン《解剖学の少年》，浜いさを《箱の男》，吉田良《すぐり》アクセル・ルーカス《無題》，土屋順紀《紋紗着物 月光》 他）

(7) 研究紀要

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）
料金 無償
配布先 大学，研究機関等

(8) 概要

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）
料金 無償
配布先 美術館，区内学校，研究機関等

(9) パンフレット（日本語版，英語版）

発行年月日 在庫を配布し，平成17年度作成せず。
料金 無償
配布先 会場内配布，問い合わせへの対応

2. インターネットを用いた広報

ア．ホームページ（展覧会スケジュール等に連動して更新，随時小更新）

本館・工芸館のホームページでは，画面上の展覧会情報に会場風景，作品図版，各種トピック及び用語解説（工芸作品）を掲載するほか，最新情報（「トピックス」欄）や，講演会・ギャラリートーク等イベント情報（「イベント」欄）の充実を図った。また，「こどものページ」を開設し，本館・工芸館の所蔵作品・展覧会の普及や，春休み等の児童生徒向けプログラムの告知に努めた。さらに，更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに，インターネットにおける情報検索時の露出を向上させるよう努めた。なお，今年度は，ホームページの構成及びデザインを一新し，情報更新の頻度の増加に対応するための検討とコンテンツの準備を行なった。

イ．メールマガジン（毎月発行）

チラシを作成しない常設展の展示作品や特集展示の予告・案内を始めとして，美術館の側から美

術愛好家に積極的に働きかけるよう、引き続きメールマガジンを発行した。

ウ．美術館情報システムによる広報活動

平成17年3月に公開した独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム（試行版）を平成18年1月、本版としてデータの追加更新を行うとともに、平成18年3月、同システムの英語版（試行版）を公開した。

平成16年3月に東京都現代美術館美術図書室、横浜美術館美術図書室と共同での横断検索ALCは、国立西洋美術館が平成17年3月に参加しており、以後、継続して稼働を続けている。これらシステムの稼働により、継続して、所蔵作品及び資料情報の提供の高度化に努めている。

3．その他の広報

本館：

ア．プレス・リリースの充実

引き続き、プレス・リリースをカラー印刷とし、従来のカラー・コピーと同程度のコストで、出品作品等の魅力をより正確に伝えられるようにした。また、プレス用の画像をデジタルデータで貸し出すことで、広報活動の利便性を向上させ、プレス側からのさまざまな要望に迅速かつ柔軟に応えられるようにした。

イ．『ぴあ』との年間契約

代表的な情報誌『ぴあ』の展覧会紹介欄を年間で15枠買い取るなど、定常的な広報媒体とした。

ウ．「読売新聞」に毎月1回「近代美術の東京」を連載し、所蔵作品の普及と館の知名度の向上を図った。

エ．各展覧会の性格に応じた広報活動に努めた。一例として、現代美術を紹介する「ドイツ写真の現在 かわりゆく『現実』と向かいあうために」展では交通広告を中心とし、近代作家の個展である「須田国太郎展」では、『朝日新聞』『毎日新聞（東京都民版）』『サンデー毎日』『東京人』など、活字メディアを中心とした広報活動を行った。

オ．引き続き、最寄り駅（営団地下鉄東西線・竹橋）に通じる東西線と京王線及びJRの駅だけではなく、展覧会によっては小田急線・東急線の駅における掲示を行った。例えば「ドイツ写真の現在」展では、横浜トリエンナーレの乗降客を見込み、東急線の桜木町駅に掲出した。

工芸館： 工芸館では、次の3誌に所蔵品を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図っている。

ア．「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』

その月の展覧出品作のなかから一点名品を選び、その見所、歴史的意義、作家のプロフィールなどを解説する。

イ．「古典が息づく現代の工芸 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』

（平成16年1月～平成17年12月）

工芸作家の制作において、何世紀にもわたって伝えられてきた各時代のジャンルの異なる古典がさまざまな形で息づいている。この連載は所蔵作品の中から名品を一点選び、古典がどのように生かされ、作品制作と結びついているかをみることによって、工芸作品の奥の深さを知ってもらおう。（平成16年1月～平成17年12月）

「茶室の工芸学 現代工芸家の茶器 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」

『茶道誌淡交』（平成18年1月～）

当館の所蔵品のなかから茶碗、釜、棗といった茶室で使用される工芸品を取り上げ、その作品において、いかに近代の作家たちが個性を表現しているかを解説する。

ウ．「日本の至宝 東京国立近代美術館コレクションより」『TAIKI プラス別冊』（季刊）

所蔵作品の中から名品を一点選び、その見所、作家のプロフィール、歴史的意義などを解説する。

また、下記の小冊子に情報を提供し、各号で展覧会広報を行っている。

・「展覧会情報」『ICLUB』（発行：伊勢丹）

在日外国人に対する展覧会情報の提供。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館： 「現代の眼」については、本館・工芸館の特別展・企画展にあわせた特集を組み、その会期前に発売できるように調整することで、来館者が鑑賞時に有効に活用できるようにした。展覧会以外の活動についても、レポートとして適宜掲載し、資料として後年活用されるよう心がけた。

また、平成15年度より配信を始めたメールマガジンの購読者数は、平成18年3月31日現在で2,788人(前年度末：1,900人)を超えており、当館の活動に継続的な関心を持つ人への広報手段として、またそうした人を増やす手段として、今後も内容を拡充するなど、発展的に活用していきたい。

工芸館： 昨年度に引き続き3誌において、工芸館の活動ならびに近現代の工芸作品についての理解を促すための普及活動に力を入れた。テーマを変えながら連載を続けており所蔵品のさまざまな魅力を紹介できた。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 「現代の眼」の編集・発行については、年度当初に年間スケジュールを作成し、できるだけ早い原稿依頼・編集を心がけているが、それでもなお遅れが出ることがあった。連載形式の記事や、コラム形式のエッセーを蓄積するなど、原稿遅延への対策を講ずる必要がある。また、インターネットを用いたメールマガジンの試みについては、技術上、デザイン上の専門的スタッフを要する新しい活動分野であり、今後その充実を図るためには諸種の課題がある。

工芸館： 上記のような試みを今後も継続するとともに、これまでに提供してきた所蔵品解説をまとめ有効に活用し、さらに工芸館の周知を徹底できるよう、広報の内容を検討・改善していきたい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (1)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化

(1) 本館

平成17年度にデジタル化した美術作品の件数	520件
平成17年度末収蔵作品数	9,353件
平成17年度末デジタル化作品数	9,353件
	(カラー：3,160画像 白黒：10,680画像)
今後のデジタル化の対応	毎年500件をデジタル化予定

(2) 工芸館

平成17年度にデジタル化した工芸作品の件数	340件
平成17年度末収蔵作品数	2,541件
平成17年度末デジタル化作品数	2,666件
	(カラー：1,560画像 白黒：1,680画像)
今後のデジタル化の対応	毎年400件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 9,205,420件
(平成12年度アクセス件数 129,602件)

3. デジタル化した情報の公開

(1) 本館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 7,193件
(館内：5,799件 館外：1,394件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 9,144件

(2) 工芸館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 125件(館内：102件 館外：23件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 2,516件

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館： 本館美術作品のデータベース化は、基本文字データは新規受け入れ作品もあわせて全点について入力を完了させており、画像のデジタル化も、モノクロ画像を含めるとほぼ9割を超えている。昨年度、試行版として公開した京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館との共同による独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムは順調に稼働しており、累積14万件を超え

るアクセスを得ている。このシステムは、独立行政法人国立美術館の4館の所蔵作品の一括検索を可能とするものであり、当館は本館9,144件(内、画像を持つもの1,394)、工芸館2,516件(内、画像を持つもの23)をこのシステムに掲出し、平成17年度は新たに文字データ204件、画像17件を追加した。今後、新規受入作品について、文字、画像ともにデータを拡充する予定であるが、著作権のあるものについては、文化遺産オンラインの権利処理ガイドラインの策定を踏まえながら、一括での許諾処理及び公開について検討を進める。なお、次年度以降の文化遺産オンラインへの対応としては、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムから4館データを一括して提供することを予定しており、そのためのアプリケーションの開発及び国立情報学研究所との調整を図るため、文化遺産オンライン運営委員会専門委員会に出席して、相互連繫について検討を進めた。

工芸館：引き続き、所蔵作品のデジタル化の推進に努め、平成17年度中に昨年度までの所蔵作品については全点デジタル化を完了する予定である。また、ホームページへの展覧会情報の掲載ではできるだけ多くの作品を掲載し、会場風景の更新などをして、観衆の関心を高めるよう心がけた。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ホームページでは、基本文字データのデータベース検索システムを公開しているが、デジタル画像については、著作権が切れた作品、もしくは当館の代表的な作品として「とうきんびコレクション」に選定し、ホームページ上での公開について特に許諾を得たものに限り、公開するにとどまっている。著作権の切れた作品については、平成17年度同様、ホームページの所蔵作品検索システムにおいて、デジタル画像を公開表示するように努める。あわせて、作家・作品の解説文の蓄積を拡大して、一層の情報提供に努める。

工芸館：展覧会への関心を高めるためにも、開催前から展覧会の情報を多くの画像を掲載し、作家のメッセージ等の文字情報の充実に努めるなど、今後の検討の余地がある。また、会期中に行ったギャラリートークや関連事業の報告などを行い、インターネットを通じた広報戦略の徹底につとめたい。

【計画を達成するために障害となっている点】

館外(インターネット)での公開については、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムを本版化し、文字・画像ともにデータの拡充に努めたが、著作権処理の問題が大きく、現在、文化庁をはじめ国全体で権利処理のためのガイドラインに取り組んでいる状況であり、今後は、その動向を見極めつつ、文化庁の文化遺産オンラインとも連繫しながら、対応を検討していきたい。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領，完全学校週5日制の実施等を踏まえ，学校，社会教育関係団体と連携協力しながら，児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成，講座，ワークショップ等を実施することにより，美術作品等への理解の促進，学習意欲の向上等を促し，心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また，児童生徒を対象とした事業について，中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

本館，工芸館とも児童生徒を対象にした事業としては，一般からの募集制による鑑賞プログラムやワークショップ等，展覧会の内容や対象年齢に合わせたきめ細やかな対応を心がけた。学校からの依頼に基づいて，児童生徒へのガイダンスやギャラリートークを行うほか，その指導者である教員からの研修や講演の要望に対してもできるだけ対応し，こちらからも折にふれて積極的な働きかけを行って連携を強めている。

1. 本館

小・中・高校生に対するギャラリートーク，ガイダンス，職場見学等の対応を随時行った。

なお，大学生に関しては「(3) - 2 大学等との連携」を参照のこと。

小学校： 4件(151人)

中学校： 17件(220人)

高校： 2件(181人)

うち，児童生徒へのギャラリートークにボランティアが活動した件数 8件

(参考：教員及び教育関係者への協力)

小中高校教員及び教育関係者の研究会等への協力(講演，展示解説等)： 4件

板橋区立中学校教育研究会美術部会，東京都図画工作研究会，水戸工業高校，練馬区図画工作研究部

開催場所： ギャラリー内，講堂，エントランスホール等

教職員鑑賞プログラム

「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」教職員研修会 2回(うち平成17年度実施は1回)

参加者数： 128名 / 107名

「近代日本画の名匠 小林古径展」美術館活用研究会

参加者数： 66名

「生誕120年 藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」美術館活用研究会

参加者数： 108名

こどもセルフガイド

ア. 小・中学生を対象として，所蔵品展に関連したこどもセルフガイド「東京国立近代美術館体験型ワークシート MOMATかんさつ日記」を作成し，来館した小中学生に配布し，鑑賞の一助となるようにした。

イ. 小・中学生を対象として，企画展「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」に関連したこどもセルフガイド「ゴッホ展こどもセルフガイド」を作成し，学校等に配布するとともに，来館した小中学生に配付し，鑑賞の一助となるようにした。

ウ．小中学生を対象として、企画展「生誕120年藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」に関連したこどもセルフガイド「フジ・タってどんなひと？ フジタの絵の世界を旅してみよう」を作成し、学校等に配布するとともに、来館した小中学生に配付し、鑑賞の一助となるようにした。

ホームページによる広報

ホームページ上の「こどものページ」の内容の充実を図り、当館の主な作品の図版、見方のヒントなどを掲載。児童生徒が感想の書込みを行える仕組みとした。

ボランティアによる小中学生向けプログラム（「(3)-3」ボランティアの活用状況）を参照）

「夏休み！こども美術館」として、夏休みの期間中、ボランティアのガイドスタッフによる、ギャラリートーク（所蔵作品解説）及びワーク（所蔵作品解説と連動した制作実習）の小中学生向けプログラムを行った。

小学生プログラム：2日間 毎日2回ずつ（計4回） 12グループ，117人

中学生プログラム：3日間 毎日2回ずつ（計6回） 19グループ，144人

2. 工芸館

平成17年度の小・中・高校生の受け入れ実績は下記のとおりである。

大学生に関しては「(3)-2 大学等との連携」を参照のこと。

中学校：2件（9人）

（参考）小・中学校の教員の研究会：2件（28名）

（参考）小学生を対象とした工芸鑑賞プログラム作成のための共同研究（24名）

工芸館ガイドスタッフによる児童生徒を対象としたトーク&ワークショップ「どきどき！こども工芸館」を実施し、鑑賞と小品制作の2つの観点から工芸作品の理解を深めた。

所蔵作品展「動物とあそぼう」の会期中、小・中学生を対象とした鑑賞補助教材「たんけん！こども工芸館」を配布し、スタンプラリーの形式も採用して楽しみながら工芸に関するクイズに答える手法で鑑賞の幅を広げる工夫をした。また、動物をテーマとする出品作の絵とコメントを記入して工芸館2階休憩室に掲示する「動物にがえ大会」を実施し、絵と言葉の2つの方法で作品鑑賞から得たイメージを表現する試みを行った。さらに、出品作家・島添氏を招いてワークショップを行い、機能を実現しながら自由なイメージをふくらませるものづくりを行う工芸作品の理解を実践的に検証した（参加人数：小学生13，未就学児3人）。

文京区小学校と共同して小学生を対象とした鑑賞教育のモデルケース作成の試みを行った（参加人数：24人）。その際、当館で実施中のタッチ&トークの方式を採用した。

自己点検評価

【良かった点，特色のある取組み】

本館：引き続き、夏期・春期休暇中の小・中学生を対象にした事業や、学校からの要望による展示解説・案内を、ボランティアの協力を得て実施しているほか、修学旅行時などに予約を受けた中学生への解説・案内、地元の中学校の職場体験など、可能な限りきめ細やかな対応を心がけた。夏休みの児童生徒向けのプログラムは、工芸館・フィルムセンターと連携した「キッズ MOMAT 2005」で、共に広報に努めることができた。また、新しくテストケースとして、都立飛鳥高校の生徒を、東京国立博物館、国立西洋美術館と協力して受入れ、単位制高校の学修に寄与した。新しく小中高校の教職員に対する企画展解説研修を実施し、ゴッホ展のワークシートは、小中学校からの要望に応じて2万枚以上を配布、鑑賞授業の教材として活用された。東京都図画工作研究会の研修を、国立西洋美術館と共同で実施するなど、教員を通じて学校教育での鑑賞教育の必要性を伝えることができた。

工芸館：児童生徒の積極的な取組みを実現するために、当館における鑑賞教育は、ゲームやクイズの

方式を採用して楽しみながら工芸の本質を探れるよう工夫を凝らした。昨年度に引き続き行ったことで教育者や保護者の関心も高まり、また、昨年度当館の鑑賞教育を体験した児童が主体的に来館した例もみられたことは、大きな成果だったと考える。また、鑑賞によって得たイメージを言葉と絵で表現する試みは、参加者のさまざまな可能性を広げ、同伴した保護者や友人等との会話が弾むきっかけとなった点も重要であった。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 児童生徒を対象とした事業を継続することにより得られた、鑑賞教育に関する知見や情報を、今後は学校現場や他館に伝えていく必要がある。教職員向けの研修や研究会等を通じて、発信するしくみを考慮中である。

工芸館： 工芸館はスペースが狭く、ワークショップ等実践的な鑑賞教育の実施に際し参加人数や開催規模などの制約が生じた。今後は個別のワークショップの実施を越え、昨年度から重ねてきた経験を活かして、実践的な鑑賞教育のモデルケース作成の段階に移行する必要があると考える。また、平成17年度は1件のみに終わったが、小中学校等とより密な協力体制をとって、学校教育と連動した鑑賞教育の考案とその提供に努めたい。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 本館

(1) 講演会 9回(年度計画記載回数:15回,但しギャラリートーク等を含む)

開催回数 計9回

開催場所 本館講堂

参加者数 1,002人 1回平均112人(平成12年度実績 183人)

担当した研究員数 各回約2人(講演者含まず)

事業内容 各展覧会に合わせて、出品作家・当館研究員・外部の専門家等による講演を行った。

(2) ギャラリートーク 41回

常設展を対象としたギャラリートーク

ア. 研究員による所蔵品ガイド(所蔵品展ごと最初の土曜日)

開催回数 計4回

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 150人 1回平均38人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 所蔵品展の見どころを解説

イ. 研究員によるハイライト・ツアー

(毎月第1日曜日無料観覧日,午前11時から60分程度)

開催回数 計12回

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 288人 1回平均36人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 近代美術の流れを辿りながら,所蔵品の見どころを解説

ウ. 研究員によるフライデー・トーク

(月1回,金曜日,企画展開催時,午後6時から1時間以内)

開催回数 計11回

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 375人 1回平均34人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 所蔵品に関して,テーマを絞った専門的解説

エ. アーティスト・トーク

(年5回,所蔵作品展会期毎,金曜日,午後6時30分から1時間程度)

開催回数 計5回
 開催場所 所蔵品ギャラリー
 参加者数 415人 1回平均83人
 担当した研究員数 各回2人
 事業内容 展示中の当館所蔵作品の前で、作者が自作について語る。開催後10～15分程度のダイジェスト映像を制作し、会期中ギャラリー内で上映。

企画展を対象としたギャラリートーク

開催回数 計9回
 開催場所 企画展ギャラリー、ギャラリー4
 参加者数 523人 1回平均59人(平成12年度実績 140人)
 担当した研究員数 各回約2人
 事業内容 各展覧会の内容に合わせた研究員や出品作家によるギャラリートークの実施。

ガイドスタッフによるギャラリートーク

(3)-3「ボランティアの活用状況」を参照。

(6) アンケート結果

[常設展関係]

ハイライト・ツアー(回答数30件)
 ・良い 100.0%(30件)・普通 0.0%(0件)・悪い 0.0%(0件)
 フライデー・トーク(回答数28件)
 ・良い 82.1%(23件)・普通 7.1%(2件)・悪い 3.6%(1件)
 アーティスト・トーク(回答数150件)
 ・良い 92.7%(139件)・普通 6.0%(6件)・悪い 0.0%(0件)

[企画展関係]

講演会

ゴッホ展(回答数50件)
 ・良い76.0%(38件)・普通20.0%(10件)・悪い4.0%(2件)
 小林古径展(回答数146件)
 ・良い70.5%(103件)・普通23.3%(34件)・悪い6.2%(9件)
 アジアのキュビズム展(回答数43件)
 ・良い95.3%(41件)・普通4.7%(2件)・悪い0.0%(0件)
 須田国太郎展(回答数50件)
 ・良い82.0%(41件)・普通16.0%(8件)・悪い2.0%(1件)

ギャラリートーク

ドイツ写真の現在(回答数69件)
 ・良い88.4%(61件)・普通8.7%(6件)・悪い2.9%(2件)
 アウグスト・ザンダー展(回答数9件)
 ・良い66.7%(6件)・普通11.1%(1件)・悪い22.2%(2件)
 須田国太郎展(回答数29件)
 ・良い100.0%(29件)・普通0.0%(0件)・悪い0.0%(0件)

2. 工芸館

ギャラリートーク	23回	1,097人
タッチ&トーク(ボランティアによる)	91回	タッチ:967人,会場トーク1,134
パフォーマンス	1回	108人

(2) ギャラリートーク23回(年度計画記載回数:21回)

常設展を対象としたギャラリートーク

開催回数	計10回
開催場所	展示室
参加者数	256人 1回平均23.7人
担当した研究員数	各回1人(トーク講師含む)
事業内容	各展覧会に合わせ,当館研究員,作家等によるトークを行った。

企画展を対象としたギャラリートーク

開催回数	計13回
開催場所	企画展展示室
参加者数	841人 1回平均64.7人
担当した研究員数	各回約2人(トーク講師含む)
事業内容	各展覧会に合わせ,出品作家や当館研究員,外部の専門家等によるトークを行った。

(3) パフォーマンス

開催回数	計1回
開催場所	工芸館2階ホール
参加者数	108人 1回平均108人
担当した研究員数	各回6人(トーク講師含む)
事業内容	展覧会に合わせ,ピアニストによるトークと演奏を行った。

(4) アンケート結果

[常設展関係]

ギャラリートーク(回答数21件)

・良い 90.5%(19件)・普通 9.5%(2件)・悪い 0.0%(0件)

[企画展関係]

青柳いずみコンサート(回答数18件)

・良い 88.9%(16件)・普通 11.1%(2件)・悪い 0.0%(0件)

ギャラリートーク

伊砂利彦 型染の美(回答数87件)

・良い 79.3%(69件)・普通 18.4%(16件)・悪い 2.3%(2件)

日本のアール・ヌーヴォー1900-1923(回答数31件)

・良い 77.4%(24件)・普通 19.4%(6件)・悪い 3.2%(1件)

自己点検評価

【良かった点,特色ある取組み】

本館: 講演会,ギャラリートーク共に,展覧会の内容に即して幅広い主題によるプログラムを組み,また「ドイツ写真の現在」展では,来日した出品作家本人の話を聞く機会を設けた。常設展の解説プログラムについては,参加者のアンケート結果や意見に基づいて,その動機や目的の多様性,知識や経験の違いに対応すべく再検討した。結果,研究員によるフライデー・トークは,金曜夜と土曜朝に回数を増やしてキュレータートークとし,ハイライト・ツアーは所蔵品ガイドを行う解説ボランティアに移管,新たに所蔵作品について作家自信が語るアーティスト・トークを新設した。

工芸館：平成17年度は観客の知識や関心のさまざまなレベルを想定して出品作家や研究者を招いてギャラリートーク等を行い、展示内容の理解を深めるよう努めた。出品作家についてもこれまでは当館の所蔵作品とほぼ類似の傾向を持つ工芸作家やデザイナーが大半であったが、当館でもほとんど未開拓の分野で活躍するイラストレーターやピアニスト等からも話を聞いたことは、来館者に新たな視点で工芸を紹介する機会となり、たいへん有意義であったと考える。また海外からも講師を招いたことは、異なる歴史的背景や思想を比較しながら、工芸の現況を捉え直す契機となった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ハイライト・ツアーや、入館者の多い企画展開催時の所蔵品ガイドでは、参加者が多数(30人以上)になって肉声が届かないケースが出てきたため、音量を絞ったポータブルなマイクシステムの導入を検討している。また、講演会は、講演内容や講演者によっては聴講希望者が講堂の収容定数を越えるため、事前申込み制(抽選制)の採用など、円滑な実施のための手立てが必要である。

工芸館：平成17年度のギャラリートーク等の事業は、内容に多様性を持たせたことで、一般的な観衆の関心を高めることができたが、実施方法については、対談やディスカッション形式をとったり、展示内容と関連するパフォーマンスの実施など、今後もさまざまな工夫を検討していきたい。また、海外から講師を招くのは、工芸館でははじめての試みであったが、今後も工芸の研究を推進するためにもさまざまな機関へも協力を働きかけて実現するよう努めたい。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討，実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し，専門性を高めるための研修を実施し，人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに，情報交換，人的ネットワークの形成に努める。

実 績

学芸担当職員（キュレーター）研修について

キュレーター実務研修

平成17年度は，東京国立近代美術館において1名を受け入れ。

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

本館：本年度は、広島県立美術館より6ヶ月に渡って1名を受け入れたが、これは、同館が当館と共催する「藤田嗣治展」（平成17-18年度）及び鬘光展（平成18-19年度）の準備を兼ねた研修となった。両展覧会の企画・立案及び調査研究に共同で携わる絶好の機会となったほか、藤田嗣治展については文献目録の編纂や執筆に参加するなど、多くの具体的成果が上がった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：この「キュレーター研修」制度そのものは、一定の経験を積んだ学芸員を対象としているため派遣側に大きな負担がかかるなど、多くの問題点を抱えている。来年度からは、より参加しやすい形での実施を検討したい。

(3) - 2 大学等との連携

実 績

1. 博物館実習生

(1) 本館

受入期間 平成17年8月22日～平成17年8月26日(5日間)

開催場所 本館(会議室・アトライブラリ・所蔵品ギャラリー)

参加者数 10人(昨年度実績9人)

担当した研究員数 11人(受入れ担当1人, 講義等10人)

実習内容 講義・館内見学・ギャラリートーク実施・展示プラン立案など。

特記事項 「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設定。実習として, 最終日に所蔵作品のギャラリートーク(解説)を行った。

(2) 工芸館

受入期間 平成17年8月22日～平成17年8月26日(5日間)

開催場所 工芸館(会議室)

参加者数 6人(昨年度実績4人)

担当した研究員数 7人(客員研究員を含む)

事業内容 講義, 館内見学, 作品取り扱いなど。

2. その他の連携・協力

(1) 本館

大学, 生涯学習施設等の授業への協力(講演会, 展示解説等を実施)

ア. 大学授業, 学会等への協力 2件 2回 (46人)

イ. 大学生のインターンシップ受入(6月から9月にかけて2名を受入)

ウ. 生涯学習施設等への協力 5件 5回 (98人)

大学等との協力のもとに講演会を実施

開催期間 1日

開催場所 本館講堂

参加者数 71人

担当した研究員数 1名

事業内容:

「須田国太郎展」に特別協力をしている大阪大学, 同大学附属図書館との共催により, 同大学教授で附属図書館副館長でもある天野文雄氏が講演を行った。同大学附属図書館が所蔵する須田国太郎の能・狂言デッサンについて, 能楽研究を専門とする天野氏がその近代能楽史資料としての希少性, 重要性を論じた。

(2) 工芸館

校外授業として作品熟覧 3件(計84名参加)

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

本館： 博物館実習については，講義や館内見学等により美術館の仕事の全体像を伝えるとともに，特に「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設け，各実習生によるギャラリー・トークの模擬演習を研修プログラムに組み入れ，主体的に関わる実習として一定の成功を収めたと考える。試験的に，大学生のインターンを受け入れ，夏休みの教育プログラムの企画，準備，実施の補助を通じて，就業体験に協力した。

工芸館： 工芸館での博物館実習では講義形式の授業も従来どおり実施したが，講義だけではなく，作品の貸出作業の見学や，工芸館で定期的に行っているボランティアガイドスタッフによる「タッチ・アンド・トーク」の見学など，工芸館の実際の業務の現場に立ち会う機会をできるだけ提供するようにした。工芸作品に対する理解を深めるだけでなく，美術館の実際の業務についても，理解を深めることができたものと思う。

【見直し又は改善を要する点】

本館： 大学との連携を将来的にどう計っていくかに関しては長く検討中であったが，平成17年度のインターン受入れの試行等を通じて，来年度から博物館実習を廃止しインターンシップを新設することとした。

工芸館： 大学の授業の一環として学生に対してギャラリートークや作品熟覧の機会を提供することについては，大学等の教員からの要望や問い合わせも増えてきており，こうした活動に対する要望は高まってきていると思われる。ただし，学生の参加人数が多い場合，充分に対応できない場合もあるので，ボランティアのガイドスタッフの協力などで，できるだけこうした要望にこたえるようにしていきたい。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 本館

(1) 登録人数 31名 (平成18年3月31日現在)

(2) 所蔵品ガイド 281回 (参加者: 4, 112名)

49回 / 1,182人 / 平均24人 (4/1~5/22、平成16年度を含む)

36回 / 877人 / 平均24人

59回 / 509人 / 平均9人

61回 / 691人 / 平均11人

59回 / 641人 / 平均11人

17回 / 212人 / 平均13人

(3) 児童生徒へのガイド(「こども美術館」) 14回 (参加者: 389名)

学校等からの申込みによるギャラリートークへの協力 8回

((4)「児童生徒を対象にした事業」参照)

(4) その他のガイド 3回 (参加者: 51名)

(5) 活動内容

常設展開館日の午後2時より約1時間、来館者との対話を交えながら、所蔵作品についてのギャラリートークを行った。また、春夏の「こども美術館」や学校からの申し込みに対して、小・中学生へのギャラリートークや制作指導、一般団体からの申し込みに対して、ギャラリートークを行った。常設展の展示替えごとに例会を開催し、研究員の展示に関する講義を受け、その時々の問題点等について協議しながら、トーク・プログラムを運営した。7月1日から8月31日にかけて解説ボランティア2期生を募集したところ、10名前後の枠に対し93名の応募があった。担当研究員と庶務課職員による書類選考、面接を実施し、12名を採用した。10月から12月にかけて、近代日本美術史講義やトーク実習等を含めた「2期養成研修」を7回実施した。2期生は1月より活動を開始した。

(6) アンケート調査

平成17年度は実施していない。

2. 工芸館

(1) 登録人数 19名

(2) タッチ&トーク 91回 (参加者: タッチ967名・会場トーク1,134名)

(3) どきどき!こども工芸館 3回 (参加者: 47名)

((4)「児童生徒を対象にした事業」参照)

(4) 英語タッチ&トーク 2回 (参加者: 14名)

(5) 活動内容

会期中の毎水曜日と土曜日の午後2時からボランティアスタッフ(工芸館ガイドスタッフ)によるガイド タッチ&トーク を実施した。約60分間で行うガイド内容は、会場で展覧会の見所やさまざまなエピソードを紹介し、その内容にあわせ、1階会議室に設けた「さわってみようコーナー」にて、所蔵作家等の資料や作品(所蔵登録外)に触れながら鑑賞する。また「どきどき!こども工芸館」では、児童生徒の夏休みにあわせた鑑賞機会の充実を促進するために、対象年齢を限定した タッチ&トーク を実施し、そこで得た印象を小品の作成を通して表現する試

みを行った。また、英語によるガイド(2回)やハンディキャップを持った方へのガイド(1回)を実施した。展示ごとに内容等に関する担当研究員のレクチャーを行い、さらにフォローアップ研修等を重ねることで、ガイドの実力を高めるとともに、活動意欲の向上を図った。

(6) アンケート調査

タッチ&トーク(回答数48件)

・良い 68.8%(33件)・普通 29.2%(14件)・悪い 2.0%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：1日も中止することなく、常設展開催中、毎日所蔵品ガイドを実施した。活動開始より3年目を迎えてギャラリートークの内容も安定・充実し、対話と解説という混合スタイルは、当館の特色あるプログラムとして定着した。所蔵品ガイド以外でも、子ども対象のトークなど、ボランティア各人が得意な分野で臨機応変に対応できるようになってきている。

2期生の養成研修には1期生も意欲的に関わり、約2年間の活動経験を生かしつつ、作品調査やトークへのアドバイスや意見交換が行われた。来年度からは、これまで研究員が担当していたハイライト・ツアーもボランティアが担うこととなり、来館者に親しまれるガイドが期待される。

工芸館：さわってみようコーナーでは日常的な器を中心に工芸の素材・技法の基礎的な情報を紹介し、会場ではより造形性の高い作品を紹介した。両者で扱う作品に関連性を持たせることで、展覧会の企画意図の理解を深め、工芸一般への関心を引き起こすことができた。その際、作品を触るあいだにグループとしての一体感が生まれ、リラックスした環境のなかで鑑賞を可能とるように見受けられる。メンバーの活動意欲とガイド内容の向上のために日頃から細やかな対応するよう心がけ、フォローアップ研修の機会を重ねて設けている。その成果もあり、ボランティアスタッフ全体に活動意欲がみなぎり、自ら率先して学習グループを作ったり、作家の個展や生産地での調査を進めるなど努力する様子が見られ、運営もスムーズに行うことができた。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ハイライト・ツアーや、入館者の多い企画展開催時のギャラリーガイドでは、ガイドの声が十分に届かないケースが出てきたため、ポータブルなマイクシステムを導入するなど、快適なツアー環境の確保のための検討が必要である。

工芸館：2年間の登録期間のうちに、引越や健康状態等、各ボランティアスタッフのライフスタイルにも変化がみられ、一方で活動内容が多様化することにより、現在の登録人数19名では個々の負担が大きくなった。活動を継続しやすい体制を整えるためにも、平成17年度中に増員を見越した2期メンバーの募集と研修を行い、次年度以降の活動の幅を広げる予定である。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等，国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 本館

「ゴッホ」展	協賛：スズキ / 損保ジャパン / 大日本印刷 トヨタ自動車 / 昭和シェル石油 協力：日本航空 / 日本通運 連携協力：財団法人2005年国際博覧会協会
「小林古径」展	協賛：鹿島建設 / コスモ石油 / 大日本印刷 協力：山種美術館
「アジアのキュビズム」展	協力：日本航空
「ドイツ写真の現在」展	特別協力：ピナコテーク・デア・モデルネ，ミュンヘン
「須田国太郎」展	特別協力：大阪大学，大阪大学附属図書館

(2) 工芸館

「伊砂利彦」展	協賛：清流会・大松株式会社
「渡辺力 リビング・デザインの革新」展	協賛：セイコーウオッチ株式会社 協力：セイコーエプソン株式会社
「所蔵作品展 近代工芸の百年」	助成：大和日英基金

2. 賛助会員制度

平成16年度より発足した賛助会員制度は，一層充実した事業を展開するために，自助努力をするとともに広く外部団体等からの支援・支持を受け，運営基盤の確立を図ることを目的としたものである。会員への特典として，会員証の発行(国立美術館の所蔵作品展を随時観覧)，出版物への社名掲載，講堂・エントランスホール等施設の利用，特別内覧会・企画展への招待等を設けており，特に施設利用の特典についての問合せが増えており，平成17年度においては3社3口の更新の他，新規2社3口の入会があった。

募集対象：東京国立近代美術館の事業に賛同する団体

会員期間：入会日より1年

募集開始：平成16年10月1日

会費：一口50万円

会員・りそなカード株式会社	1口
・セイコー株式会社	1口
・株式会社二期リゾート	1口
・JUNKO KOSHINO株式会社	1口
・株式会社ティエルシイ	2口

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

本館：「ゴッホ展」及び「アジアのキュビズム」展については、日本航空（JAL）の協賛を得て、海外輸送費の減免処置が講じられたほか、「アジアのキュビズム」展の海外輸送費等は国際交流基金（共催者）が、「日本におけるドイツ 2005」に関わる「ドイツ写真の現在」展のドイツ国内輸送費及び海外輸送費等はドイツ側が負担するなどの、経費分担が行われた。

工芸館： 「伊砂利彦」展（平成17年度開催）に関して清流会・大松株式会社から100万円の助成金を得た。「渡辺力 リビング・デザインの革新」展に関してセイコーウオッチ株式会社から50万円の協賛を得、またセイコーエプソン株式会社からはパネル展示の写真出力作業につき協力を受けた。また建築写真の使用料に関して新建築社から減免を得た。「所蔵作品展 近代工芸の百年」に関しては大和日英基金の助成により、外国人講師を招聘した。

【見直し又は改善を要する点】

本館：共催展に際しての民間企業等への働きかけ（協賛の願い出等）は、基本的に共催者に任せているが、企画展に関しては、協賛活動に積極的な企業の把握やその窓口等に関するノウハウの蓄積も乏しく、日本航空（JAL）の協賛による海外輸送費等の減免処置以外、それほど実績が上がっていないのが実情である。この種の渉外活動は、依然として課題となっている。

賛助会員制度については、会員数がいまだ少なく、今後とも、さらなる会員の増加のための広報と、現会員の引き続きの加盟への働きかけ等の方策を検討していく必要がある。

工芸館： 協賛企業側から一部展覧会とタイアップした催しが提案され、展覧会との調整に多少困難がともなった。より多くの企業から協賛を得るには、タイアップ企画など企業との相互の連携が不可欠だが、企業側からのさまざまなニーズとの調整を積極的に行い、より高次の協力関係を築いていく方策を研究することが重要である。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者，身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため，各館の方針に従って展示方法，表示，動線，施設設備の工夫，整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため，観覧環境の整備プログラム等を策定し，計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し，調査結果を展示等に反映させるとともに，必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに，見やすさにも配慮する。また，音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し，入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握，分析し，夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など，入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い，気軽に利用でき，親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど，入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実 績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等

(1) 本 館

障害者トイレ	3 箇所 (1 階 1 箇所，2 階 1 箇所，地下 1 階 1 箇所)
障害者エレベータ	2 基
段差解消 (スロープ)	2 箇所 (正面玄関)
貸出用車椅子	6 台 (1 階)
貸出用ベビーカー	3 台

(2) 工芸館

障害者トイレ	1 箇所 (1 階)
障害者エレベータ	1 基 (1 階) (障害者対応ではない)
スロープ	1 箇所 (正面玄関)
リフト	1 基 (正面玄関)
貸出用車椅子	3 台 (1 階)
貸出用ベビーカー	1 台 (1 階)

2. 観覧環境の充実

(1) 「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」

音声ガイド	日本語
貸出期間	平成 17 年 3 月 23 日 ~ 5 月 22 日
貸出件数	64, 102 件 (利用率 13.5%) 平成 17 年度 平成 16 年度中 : 6, 183 件 (利用率 14.0%)

3. 夜間開館等の実施状況

(1) 夜間開館実施状況 (本館のみ)

ア. 開催日数	64 日間
イ. 入館者数	113, 647 人 (総入館者数 1, 058, 007 人，入館者率 10.7%)
ウ. 実施内訳	
「常設展」	64 日間
入館者数	34, 304 人 (総入館者数 288, 564 人，入館者率 11.9%)
「ゴッホ」展	26 日間 平成 17 年度中

入館者数 68,801人(総入館者数474,263人,入館者率14.5%)

「小林古径」展 6日間

入館者数 2,824人(総入館者数66,885人,入館者率4.2%)

「アジアのキュビズム」展 8日間

入館者数 605人(総入館者数11,356人,入館者率5.3%)

「ドイツ写真の現在」 8日間

入館者数 1,510人(総入館者数25,887人,入館者率5.8%)

「アウグスト・ザンダー」展 8日間

入館者数 2,005人(総入館者数26,200人,入館者率7.7%)

「須田国太郎展」 8日間

入館者数 1,149人(総入館者数22,673人,入館者率5.1%)

「渡辺力」展 8日間

入館者数 1,265人(総入館者数18,757人,入館者率6.7%)

「藤田嗣治展 パリを魅了した異邦人」 1日間 平成17年度

入館者数 1,184人(総入館者数16,024人,入館者率7.4%)

(2) 小中学生の入場料の低廉化

昨年度に引き続き,平成17年度開催の共催展についても共催者の協力を得て,小・中学生の観覧料金の無料化を実施した。

ア. 当館主催の企画展における入館料割引

当館が主催する展覧会において,ホームページ,展覧会チラシ,割引券,栞(外部委託)等に割引換券を付し,入館料割引を実施した。

(利用実績)

本館 「アジアのキュビズム」

利用率: 9.46%(対有料入館者) 5.66%(対総入館者)

「ドイツ写真の現在」利用率: 18.28%(対有料入館者) 11.96%(対総入館者)

「須田国太郎展」

利用率: 11.75%(対有料入館者) 8.38%(対総入館者)

工芸館 「日本のアール・ヌーヴォー1900-1923」

利用率: 11.61%(対有料入館者) 6.09%(対総入館者)

*参考 「ゴッホ展」

利用率: 20.84%(対有料入館者) 15.46%(対総入館者)

「小林古径展」

利用率: 22.05%(対有料入館者) 12.13%(対総入館者)

「藤田嗣治」平成17年度中

利用率: 17.26%(対有料入館者) 10.99%(対総入館者)

イ. 「ぐるっとパスGRUTT2005」

東京の美術館・博物館等共通券2005実行委員会に参加し,観覧料金の低廉化を図った。

具体的には,都内の美術館,博物館,動物園など46機関が加盟し,2ヶ月以内であれば,2,000円で全ての参加機関に入場できるチケット(通常料金であれば,約15,000円相当)の企画「ぐるっとパスGRUTT2005」に,常設展観覧券に企画展割引券を加えて参加した。

次年度は,チケットの価格は2,000円に据え置き,参加機関が49館に増える予定であるが,当館も引き続き参加したい。

(パス利用者) 本館 2,829人 企画展割引 1,421人

工芸館	1,825人	企画展割引	416人
*参考	フィルムセンター		2,023人

ウ．ウエルカムカード

東京都からの協力依頼による「ウエルカムカード」に参加し、外国人来館者の常設展入館料を割引した。「ウエルカムカード」は外国人旅行者を対象とした入場料金の割引サービスであり、都内の美術館・博物館・動物園等が参加している。ガイドブック・マップなどを7カ国語で作成し、空港・観光案内所・ホテル等の宿泊施設を対象に375,000部を配布するもので、広報効果も高いと考える。

(カード利用者)	本館	288人(外国人総入館者数	6,315人)
	工芸館	87人(外国人総入館者数	3,192人)

エ．企業との連携企画

東京地下鉄株式会社及び小田急電鉄株式会社との提携により「メトロ1日乗車券」等利用者の、常設展(一般のみ)及び特別展(一般,大学,高校)入館料を割引料金とした。「メトロ1日乗車券」等は、東京地下鉄株式会社が小田急電鉄株式会社と提携する事業で、東京メトロ・小田急線の全駅にポスターを掲出、チラシを配付しており、広報効果も高いと考える。平成17年度、同乗車券は8月に東武鉄道株式会社、12月には東京急行株式会社にも提携が拡大され沿線PRによる効果もより高くなったと考える。

朝日広告社との提携により、朝日新聞社が発行する週間朝日百科「日本の美術館を楽しむNO.16」に常設展「割引クーポン券」を掲載。当館施設を特集したもので、広報効果も高いと考える。(割引期間は平成17年1月27日から5月22日まで)

(4) その他の入館者サービス

特別(共催)展開催に際し、従来のチケット委託販売に併せ、当館券売所においても前売りを実施し、来館者へのチケット購入の利便性の向上を図った(「ゴッホ」展、「小林古径」展、「藤田嗣治」展で実施。)。また、藤田展においては、期間限定の前売りペアチケットを発行した。

常設展フロアプラン(会場ガイド)について、日・英の二カ国語版に加え、(財)東芝国際交流財団の助成を得て、独・仏・中・韓の4カ国語版を作成し、外国人来館者へのサービス向上に努めた。

これまでの毎月第1日曜日の常設展及び文化の日(特別展も含む)に加え、平成17年度も、5月18日「国際博物館の日」常設展観覧料金を無料とし、好評を得た。

「ゴッホ展」(共催展)の開催に際し、東京駅よりシャトルバスを運行した。

自動体外式除細動器(AED)の設置

来館者の万が一の事態に備えられるよう、本館(2台)、工芸館(1台)、フィルムセンター(1台)にAEDを導入した。また、導入に際し、本館及びフィルムセンターで研修会を実施した。

4. 一般入館者等の要望の反映

北の丸公園周辺という立地条件を踏まえ、来園者が多い四月上旬及びゴールデンウィーク中の月曜日を閉館した。また、年末年始については、昨年に引き続き12月28日、1月2日、3日を閉館日とし、来館者の利用機会の増進を図った結果、多数の来館者があった。

年末年始閉館日の入館者数：

本館	161人(28日),	191人(2日),	142人(3日)
工芸館	94人(28日),	184人(2日),	125人(3日)

企画展（共催）の開催に際し，月曜休館日を開館することで，来館者の利用機会の増進を図った結果，多数の来館者があつた。

「ゴッホ」展（会期：平成17年3月23日～5月22日）

計 40,982人

内訳 3,886人(4/4)，5,711人(4/18)，4,710人(4/25)，
9,640人(5/2)，6,736人(5/9)，10,299人(5/16)

ゴッホ展（共催）の開催に際し，木・金曜日・ゴールデンウィーク・ゴールデンウィーク以降の木・金・土・日曜日に夜間開館を実施することで，来館者の利用機会の増進を図った。

常設展会場内の撮影について，平成16年度より希望者からの申請による許可制を導入し，好評を得ている。

申請者数	申請者数	美術館	1,076人
		工芸館	530人

5. レストラン・ミュージアムショップ等の充実

本館ミュージアムショップについては，共催展の関連グッズはもとより，当館主催の特別展・企画展に伴う展覧会の関連書籍コーナーを設けるなど販売品の充実に努めた。また，当館所蔵作品をモチーフにしたグッズ（三折クリアファイル，ストラップ等）の開発販売に努めた。その他，「渡辺力：リビング・デザインの革新」展では，出品作家の新作の腕時計を協賛企業の協力を得て先行発売を行った。

工芸館では，狭隘なスペースの中，関連書籍，雑誌，現代作家による陶芸作品を販売し，特に「日本のアール・ヌーヴォー」展開催時には，出品作家の図版集，絵葉書，関連書籍を販売するなど，展覧会の特色を活かした販売物の充実に努めた。

自己点検評価

【良かった点，特色ある取り組み】

ゴッホ展において，当初から開館日の拡大し，4月11日を除き会期中無休とし，金曜日に加えて木曜日にも夜間開館を実施したが，会期後半に向けての観覧者の大幅な増加に対応するため，ゴールデンウィーク（4月29日から5月8日）の間とそれ以降の木・金・土・日全てを夜間開館日とし柔軟な運営を行った。

本館では4階休憩コーナーにプリントスタディールームを設置し，当館が所蔵する国内及び海外の写真家の作品約2,000点を，申込制によって所蔵作品展や他の美術館で開催される展覧会への出品といった展示の機会以外にも個別に閲覧できるようになった。

また，工芸館では，昨年度よりエントランスから中央階段の踊り場，2階のロビーに至るアプローチ部分の改装計画を立て改装を行っているが，平成17年度は1階の受付カウンター，展示書棚及び作品陳列棚を更新し，来館者サービスの向上に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

アンケートにおいて，予めから外国人から，英語等による解説・案内の要望があり，その対応として，フロアプラン（会場案内）などの会場配布物やギャラリーガイド等の販売書籍の英語版作成等，外国人来館者への受け入れ態勢の充実に努めているが，加えて日本人観覧者も含めた音声ガイド（和・英）が必要であると考えている。